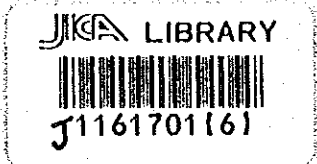


第6回 (平成12年度)

高校生国際協力実体験プログラム報告書



貧困ってなんだろう？

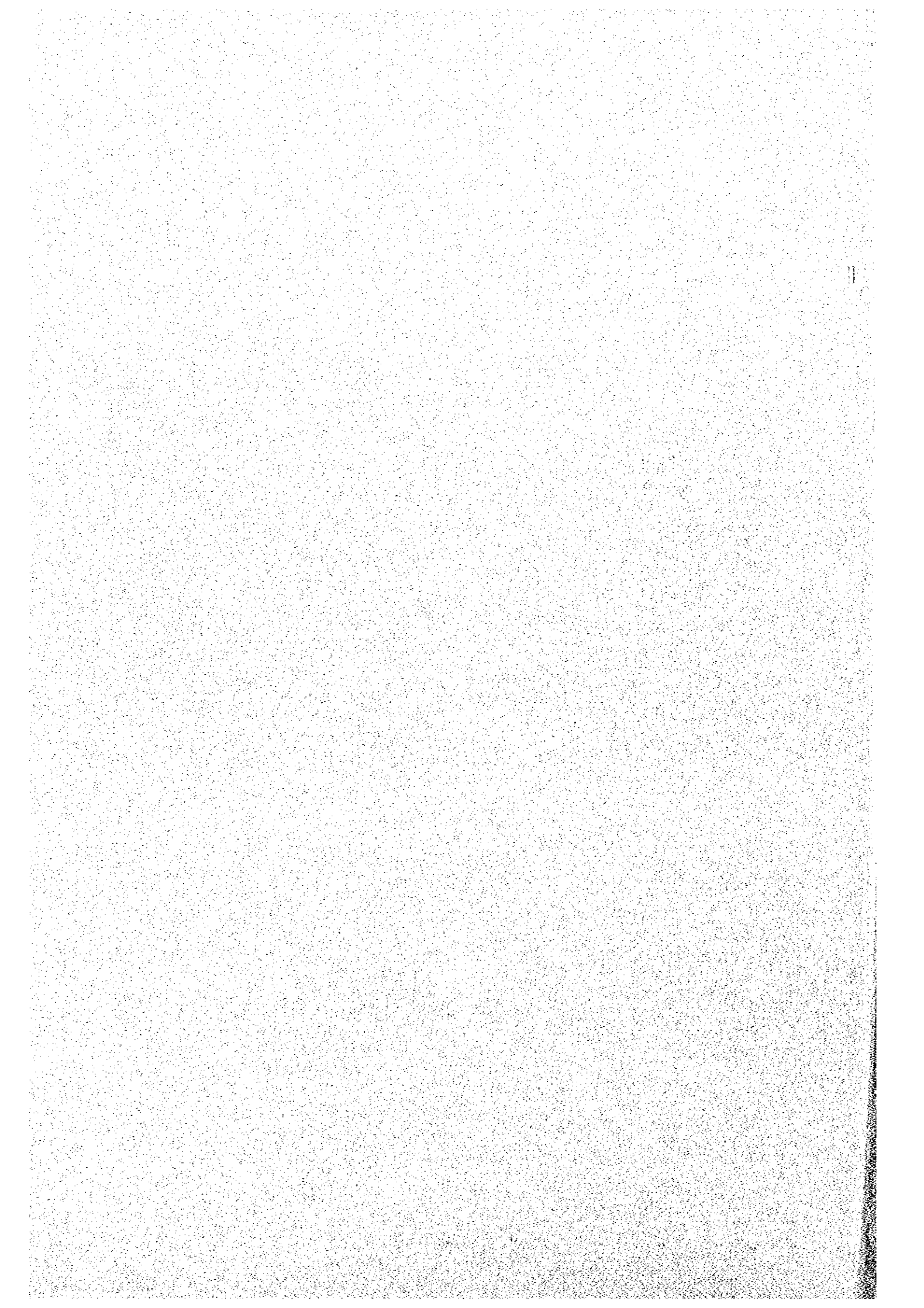


平成12年12月

JICA 中部国際センター

中部セ
J R
00-04





目次

実施要領	1
日程表	10
事前学習発表資料	13
ケーススタディ	26
報告書（生徒）	30
報告書（教員）	51
アンケート結果集計	73
評価会要約	82
来年度への改善に向けて	85
＜資料編＞	
書籍・パンフ在庫リスト	89
各種パネル所蔵リスト	92
所蔵ビデオリスト	94
JICA が実施する開発教育関連行事	96
中学校・高校教師海外研修参加者リスト	97
講師派遣実績（平成 11-12 年度）	98
集団コース研修実施一覧（平成 12 年度）	103
青年招へい事業実績（平成 12 年度）	105



1161701(6)

第6回
(平成12年度)

高校生
国際協力実体験プログラム
実施要領

1. プログラム名

第6回(平成12年度)高校生国際協力実体験プログラム

2. 実施期間

平成12年8月21日(月)から平成12年8月23日(水)まで2泊3日

3. プログラムの背景・目的

1) 背景

2002年の「総合的な学習の時間」の導入を控え、開発教育への関心は高まっている。開発教育とは、「私達ひとりひとりが、開発をめぐる様々な問題を理解し、望ましい開発の在り方を考え、公正な地球社会作りに参加することをねらいとした教育活動」である。開発教育協議会によれば、開発教育が目指すのは、①世界の文化の多様性、②開発問題の現状と原因、③地球的諸課題の関連性、④開発をめぐる問題と自分達自身との関わり、を理解し、開発をめぐる問題を克服するための試みを知り、参加できる能力と態度を養うことである。

本プログラムは、政府開発援助(O DA)の技術協力の実施機関である国際協力事業団(JICA)が開発教育の一環として、独自のリソースを活用しながら、東海・北陸7校の高校生を対象に、次の目的により2泊3日の合宿形式で行うものである。

2) 目的

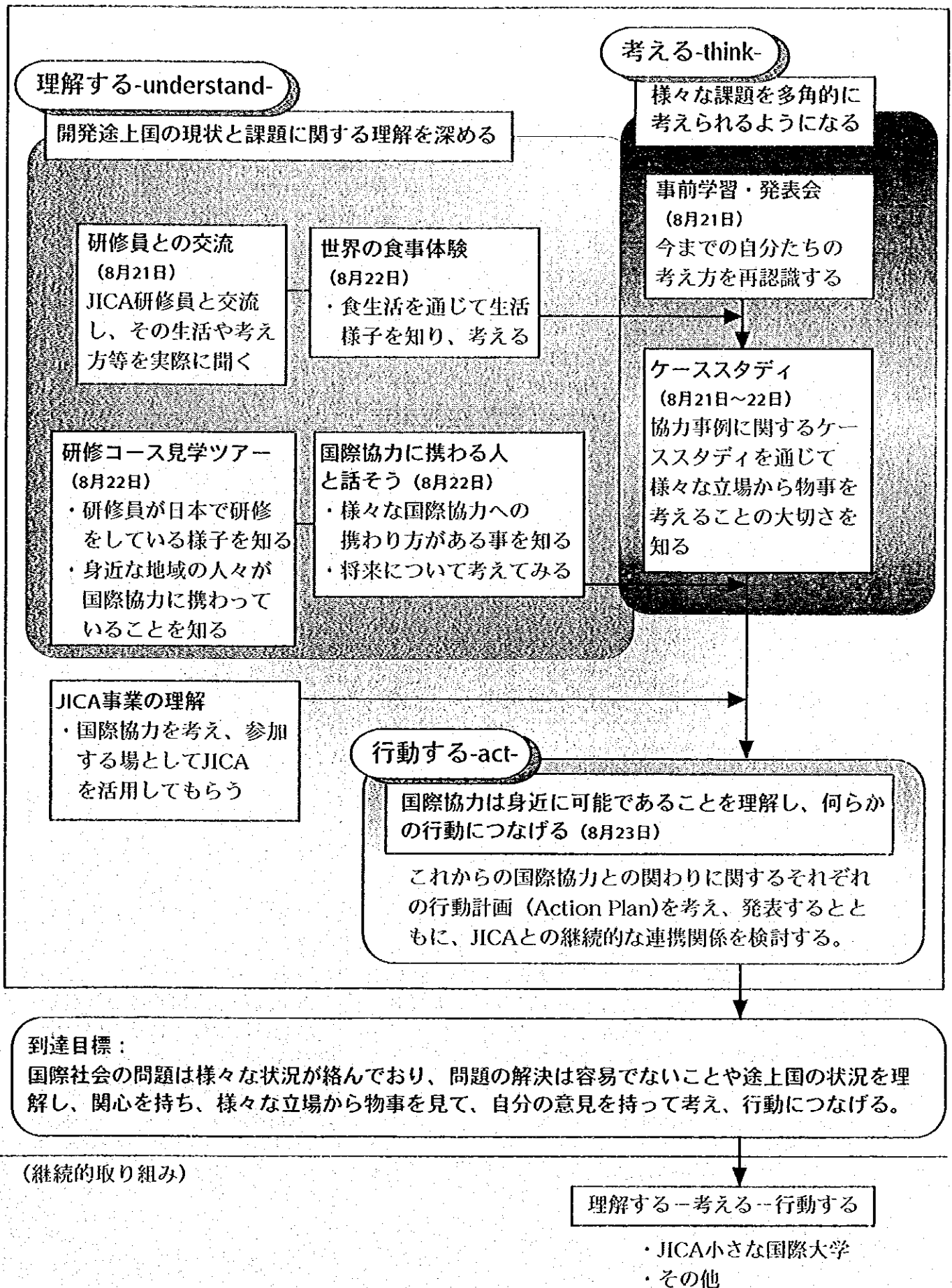
平成12年度はテーマを「貧困について考える」とし、貧困問題を通して高校生に、「国際社会の出来事は複雑な状況が絡んでおり、問題の解決は容易でなく、開発途上国の状況を知り、様々な角度、立場から物事を見て自分の意見を持って考えることが大切である」ことを伝えることを目的とする。そして、国際協力に携わる道は様々であり、どのような形で国際協力に携わっていきたいのか、考える機会を与え、全体のプログラムの中でJICAへの理解を深め、継続的な連携関係の構築をめざしている。

4. プログラムの内容

本プログラムは、上記の目的を達成するため、各プログラムを①開発途上国の現状と課題に関する理解を深める、②様々な課題を多角的に考えられるようになる、そして③国際協力は身近に可能であることを理解し、何らかの行動につなげる、の3部に分けて構成してある。(フローチャート参照)

研修員との交流や途上国の食事体験などを通して開発途上国への理解を深め、ケーススタディや国際協力に関わる人の意見を聞くことで多角的に物事を見て考えることの大切さを知る。さらに、JICA事業や国際協力へ携わる方法を紹介することで、国際協力は身近に可能であることを知り、何らかの形で行動につなげるきっかけを与える。最後に、これからの国際協力との関わりに関するそれぞれの行動計画を考えると共に、JICAとの継続的な連携関係を検討する。

2000年度高校生ODA実体験プログラム



日程順の各プログラムの内容、到達目標は以下の通りである。

事前準備

プログラム名	内容	到達目標
事前学習	貧困のイメージ、原因、解決方法を学校ごとにまとめる。	・自分たちの「貧困」に対する考え方を再認識する。 ・実体験プログラム参加への意識を高める。

8月21日

プログラム名	内容	到達目標
調べてきたこと発表会	参加者全員で調べてきた貧困のイメージ、原因、解決方法について意見交換をする。	・他校の意見を聞くことで視野を広げる。
ケーススタディ (導入編)	青年海外協力隊の体験談をもとにつくられたケーススタディに取り組む。	・援助をする側と受ける側の考え方の違いに接したときにどのように対応するか考える。
研修員との交流食事会	中部センターに宿泊している研修員と食事をしながら交流する。	・研修員の国の状況、生活習慣、問題点など普段聞けない「生の声」を実際に聞く。
ケーススタディ (グループワーク)	グループごとに各場面でどのような対応をとるか話し合う。	・国際協力の難しさ、複雑さを感じながらも、どのような解決策を導くか、話し合う。

8月22日

プログラム名	内容	到達目標
ケーススタディ (発表、ディスカッション)	グループの話し合いをもとに発表、意見交換を行う。	・ケーススタディを通していろいろな立場から多角的に物事を考えることの大切さを知る。
世界の食事を体験しよう	途上国の食事を体験する。 (パプア・ニューギニアの芋料理とマラウイのマメ料理)	・開発途上国の食生活の状況を理解する。
研修コース見学ツアー	名古屋市消防学校で火災調査技術コースの見学をする。	・途上国からの研修員が日本で技術を身につけている現場を見学する。 ・さまざまな地域の組織が各分野で国際協力に携わっていることを知る。

国際協力に携わる人と話そう	青年海外協力隊のOB・OG、大学院生、NGO関係者、JICA職員と話し合う。	・国際協力に携わる道は様々であることを知り、自分たちの将来を考える機会とする。 ・様々な立場の人から国際協力への考え方を聞き、苦労しながらも活動することの大切さを知る。
JICA職員と教師との懇親会（教師のみ）	JICA職員と教師とで主として開発教育に関して意見交換を行う。	・JICAの持つリソースの開発教育へ有効な活用方法を探る。 ・学校とJICAとの協力体制を考える。

8月23日

プログラム名	内容	到達目標
まとめの会	プログラムの総括をする。 参加者全員の1分間スピーチを行う。	・プログラムの到達目標が達成されたか確認する。 ・今後国際協力に携わる方法を紹介し、JICAの他事業への協力を促す。

5. 対象者

1) 定員：(東海・北陸地域) 各校 生徒4名及び引率教師1名 7校 35名

2) 応募資格要件

- (1) 高校において開発教育に積極的に取り組んでいる教師とその生徒
 - ・国際協力、国際関係に興味のある高校2、3年生を中心とする。
 - ・プログラムの中にはディスカッション、発表の時間が多く取り入れられているため、積極的に議論のできる生徒を希望。
- (2) 研修の全日程に参加可能であること
- (3) 健康上、参加に支障のないこと
- (4) 学校長より研修参加の許可が得られること
- (5) 保護者より研修参加への同意が得られること（生徒のみ）

6. プログラム実施体制

1) 本プログラムは国際協力事業団（JICA）中部国際センターがJICA関係団体、個人の協力を受けて実施する。

JICA 中部国際センター

所長	中島行男
総務課長	鈴木邦雄
担当 総務課	中村浩孝
	野口萩乃
業務課	沖浦文彦
	石井加奈子

2) 各プログラムの協力者

(1) 研修員との交流食事会

・研修員（別添参加研修員名簿参照）

(2) 世界の食事を体験しよう

レシピ及び生活情報の提供

・中村浩孝（青年海外協力隊OB、マラウイ）

・西尾和久（青年海外協力隊OB、パプア・ニューギニア）

(3) 研修コース見学ツアー

名古屋市消防局消防学校

教育計画係長 加納 利昭

教育計画係 青木 健司

「マレーシア火災調査技術コース」研修員 5名（別添参加研修員名簿参照）

(4) 国際協力に携わる人と話そう

青年海外協力隊OB・OG

関谷信人・豊嶋道代

名古屋NGOセンター

間杉宗臣

名古屋大学大学院

斉藤博史

（財）日本国際協力センター

古澤 幸雄

JICA/CBIC

大久保晶光

別添：参加者名簿、参加研修員名簿

平成12年度高校生国際協力実体験プログラム参加者名簿

JICA中部国際センター

学校名	氏名	学年
名古屋市立桜台高等学校	阪田 真崇	2
	鈴木 友野	2
	高見 佳代	2
	野口 愛	2
	岩内 健二	教師
愛知県立平和高等学校	山岸 健史	2
	山中 剛志	2
	長尾 美里	3
	信岡 遙	3
	薫森 英夫	教師
岐阜県立揖斐高等学校	駒月 了	3
	高橋 弥生	3
	中野 由花	3
	吉田 侑加	3
	吉田 映子	教師
三重県立伊勢高等学校	伊藤 理衣	2
	牛江 麻貴	2
	小川 真由	2
	山下 芽	2
	磯島 純菜	教師
石川県立金沢西高等学校	桜井 奈々恵	1
	笹崎 恵美	2
	中林 七穂	2
	富田 知子	3
	今井 和愛	教師
福井県立若狭高等学校	田中 章広	3
	西尾 麻衣子	3
	松宮 和美	3
	神田 実	教師
国立富山商船高等専門学校	南 明日佳	1
	村田 百絵	1
	綾部 祥子	3
	西島 麻美	3
	金川 欣二	教師

計 34名









平成12年度(第2回)溶接技術者集団研修コース研修員名簿

List of the Participants for the 2nd Group Training Course in Welding Engineer, Fiscal 2000 (Course No. J-00-00600)
平成12年4月10日～平成12年9月25日 (April 10, 2000～September 25, 2000)

国際協力事業団国際センター
〒465-0094 名古屋市中区東区北の井2-73
TEL: 052-702-1391 FAX: 052-702-1397

研修担当名 : 大久保 晶光 (JIKA)
研修監理員 : 久米 健一 (KIICHI)

(社) 日本溶接協会
〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町
産経ビル9F
TEL: 03-3257-1525 FAX: 03-3255-5196

No	写真 (Photo)	国名 (Country) 研修員番号	氏名 (Name) 企業別姓等	生年月日 (Date of Birth)	最終学歴 (Final Academic Background)	現職及び勤務先 (Present Post and Employee)	連絡先住所 (Address of Correspondence)
1		BULGARIA ブルガリア (0-00-00229)	Ms. TZANEVA Valentina Stefanova	AUG. 02, 1960 (39才)	Technical University (Diploma-Engineering, Mechanical Engineering) 工業大学 機械工学士	Research Engineer, Welding Department, Institute of Metal Science, Bulgarian Academy of Sciences ブルガリア国立科学研究所 溶接技術部 研究官	Inst. of Metal Science-BAS 67 Shiptchenski probod St., 1574 Sofia, Bulgaria
2		EGYPT エジプト (0-00-00186)	Mr. Essam Rabea IBRAHIM (既婚とその加工品)	JAN. 10, 1975 (25才)	Faculty of Engineering, Cairo University U. Sc., Metallurgical Engineering カイロ大学工学部 冶金工学士	Research Assistant, Central Metallurgical Research and Development Institute (CMRDI) 国立中央金属研究所 研究官	P. O. Box: 87 Helwan, Cairo, EGYPT
3		IRAN イラン (0-00-00177)	Mr. Mohammad Reza YAZDANPANAHI (既婚とその加工品)	APR. 24, 1968 (31才)	Tabriz University (Technical Bachelor, Mechanical Engineering) タブリーズ大学 機械工学士	Mechanical Specialist in Exploitation Technical Affairs, Esfahan Steel Company (ESCO) メカニカル専門員 機械技術者	61 Shahid Rajaiyan, Sina Alley, Bisim Av., Bozorgmehr St., Postcode 38137, Iran
4		MALAYSIA マレーシア (0-00-00173)	Mr. MOHAMAD SOM Bin Ahmad (既婚とその加工品)	JULY. 05, 1956 (43才)	Technology University (D. Tech. [Hons.] & Educt., Mechanical Engineering) 工業大学 機械工学士	Lecturer, Polytechnic Kuching, Technical Education Department, Ministry of Education 国立クワンチン陽高訓練学校 講師	Politeknik Kuching, Beg Berkunci 3094, 93050 Kuching, Sarawak, Malaysia
5		NEPAL ネパール (0-00-00303)	Mr. Shanta Raj BATASHI (牛飼とその加工品)	DEC. 14, 1968 (30才)	Nagpur University (B. E., Mechanical Engineering) ナーグプル大学 機械工学士	Lecturer, Western Regional Campus, Institute of Engineering (IOE) 国立工科大学西部校 講師	P. O. Box: 170, Pokhara, Nepal
6		SRI LANKA スリ・ランカ (0-00-00147)	Mr. Nihal RATNAYAKE (牛飼とその加工品)	JAN. 13, 1959 (41才)	University of Moratuwa (B. E., Mechanical Engineering) モラトゥワ大学 機械工学士	Mechanical Engineer, Sri Lanka Ports Authority 国立工科大学西部校 講師	No. 36/1, Temple Rd, Thelagapatha, Wattala, Sri Lanka
7		TANZANIA タンザニア (0-00-00060)	Mr. Noel Eusebio Ibrahim Scissor MBONDE	DEC. 25, 1966 (33才)	Rostov Govern. Technical University (Russia) (M. Sc., Mechanical Engineering) ロストフ工業大学 機械工学士	Instructor, Mbeya Technical College, Ministry of Science, Technology and Higher Education 国立ムベヤ工業大学 講師	Mbeya Technical College, P. O. Box 131-Mbeya, Tanzania
8		VIETNAM ヴェトナム (0-00-00361)	Mr. PHAM Thanh Hoa	JULY. 06, 1963 (36才)	Polytechnic Institute (Welding Engineer) 工業大学 溶接技術系	Researcher, Welding Department, National Research Institute for Mechanical Engineering (NRI-ME), Ministry of Industry 国立機械工学研究所 溶接技術部 研究官	Research Institute for Mechanical Engineering, Thang Long St., Cau Giay Dist., Hanoi, Vietnam

平成12年度マレーシア火災調査手法研修コース研修員名簿
 List of Participants for Fire Investigation Techniques Course for Malaysia, Fiscal 2000

平成12年07月24日～09月03日
 (July 31, 2000 - August 31, 2000)

国際協力事業団 中部国際センター
 〒465-0094

名古屋消防局 消防学校
 〒463-0003

名古屋市名東区亀ノ井2-73


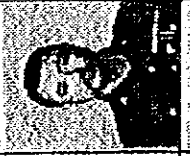



名古屋市守山区大字下志段味長廻間2280-12

TEL(052)702-1391 FAX(052)702-1397

TEL(052)736-2731 FAX(052)736-4462

研修担当: 沖浦文彦 研修監理: 西尾安代

研修担当: 加納利昭、齋木 健司

No	Photo 写真	Name 氏名、コリングネーム、研修員番号	Rank 階級	Date of Birth 生年月日	Present Post & Employer 現職及び勤務先	Address for Correspondence 連絡先住所
1		Mr. Mad Ali Bin Bahudin (D-00-01523)	Superintendent 消防監 17ランク中6番目	Aug. 1, 1957 (42)	Fire Superintendent Headquarters, Fire & Rescue Department of Malaysia 消防監(法施行) マレーシア消防救助局本部	HQ Fire & Rescue Dept. of Malaysia Jalan Maharajalela 50648 Kuala Lumpur T:603-248-6362/F:603-243-9031
2		Mr. Hamid Bin Suani (D-00-01500)	Senior Assistant Superintendent 上級消防監補 17ランク中8番目	Jun. 09, 1957 (43)	Senior Assistant Superintendent Malaysian Fire & Rescue Academy 上級消防監補(研修企画・評価) マレーシア消防救助学校	Fire & Rescue Academy Jalan Padang Tembak 44000 Kuala Kubu Bharu Selangor Darul Ehsan T:603-606-31329/F:603-604-1494
3		Mr. Borhan Bin Madon (D-00-01534)	Senior Assistant Superintendent 上級消防監補 17ランク中8番目	Jul. 19, 1956 (43)	Senior Assistant Superintendent Headquarters, Fire & Rescue Department of Malaysia 上級消防監補(警防) マレーシア消防救助局本部	HQ Fire & Rescue Dept. of Malaysia Jalan Maharajalela 50648 Kuala Lumpur
4		Mr. Nor Azlan Bin Abdul Rahman (D-00-01512)	Assistant Superintendent 消防監補 17ランク中9番目	Jul. 10, 1955 (44)	Assistant Superintendent Regional Fire & Rescue Training Center - Ipoh 消防監補(研修企画・評価) イボ地方消防救助研修センター	Regional Fire & Rescue Training Ct. Jalan Kompleks Sukan 31400 Ipoh, Perak T:603-549-5739/F:605-549-6837
5		Mr. Nazni Bin Zakaria (D-00-01501)	Assistant Superintendent 消防監補 17ランク中9番目	Mar. 26, 1959 (41)	Assistant Superintendent Penang Fire & Rescue Department 消防監補(研修企画・評価) ペナン消防救助局	Penang Fire & Rescue Department Jalan Perusahaan, 13600 Penang T:604-398-4444/F:604-398-2544

平成12年度高校生国際協力実体験プログラム日程

平成12年8月21日（月）

時間	内容	場所
～13:00	受付（チェックイン） 各自入館手続きを済ませ、入室して下さい。 その後、13:30までに講堂に集合願います。	
13:30～14:10 (40分)	開講式・自己紹介オリエンテーション 参加者全員による自己紹介 日程説明及び諸注意	JICA/CBIC講堂
14:10～14:15	休憩	
14:15～14:45 (30分)	グローバル・ビンゴ大会 目的：参加者同士の交流	JICA/CBIC講堂
14:45～15:00	休憩	
15:00～17:50 (170分)	調べてきたこと発表会（40分） 目的：各校の貧困のイメージの共有を図る。 内容：参加各校が用意してきた貧困のイメージについて、5分程度で発表する。 質疑応答（30分） 内容：調べてきたことについて質疑応答を行う。 コメント（10分） 内容：調べてきたことに対し司会がコメントし、ケーススタディへと導く。ケーススタディの内容を説明する。 休憩（10分） ケーススタディ（1）導入編 内容：グループ作業に入る。	JICA/CBIC講堂 グループ1：講堂 グループ2：講堂 グループ3：第2教室 グループ4：第3教室 グループ5：第6教室
17:50～18:00	休憩	
18:00～20:00 (120分)	研修員との交流食事会 参加者：研修員14名（通訳付き） 目的：各国研修員と参加者の交流を図る。 内容：研修員数名とグループを作り、はじめに、簡単な自己紹介と生徒が用意してきた質問を英語で行う。その後は、自由に懇談する。	食堂
20:00～	ケーススタディ（2）グループ作業編 内容：各グループ毎の討論・発表準備。 就寝	

平成12年8月22日 (火)

時 間	内 容	場 所
～10:00	ケーススタディ (3) 発表準備	JICA/CBIC講堂
10:00～12:00 (120分)	ケーススタディ (4) 発表・ディスカッション 目的: ケーススタディについてグループ毎に話し合った回答を発表・ 討論し、その結果を参加者全員で共有することにより、貧困 についての理解を深める。 内容: グループ発表、質疑応答	JICA/CBIC講堂
12:00～12:50 (50分)	世界の食事を体験しよう 目的: 途上国の食事を通じてその国の文化に触れる。 内容: 当日のお楽しみ	JICA/CBIC講堂
12:50～16:00 (190分)	研修コース見学ツアー 目的: 名古屋市消防学校で行われている「火災調査技術コース」を 見学することにより、研修内容やその地域との関わりについ て学ぶ。 内容: 消防学校において研修員の実習風景を見学した後、消防局職 員による講義を受け、学校内の施設見学を行う。	名古屋市消防学校
16:30～18:00 (120分)	国際協力に携わる人と話そう 講師: 豊嶋 道代 (青年海外協力隊OG) 関谷 信人 (大学院生、青年海外協力隊OB) 斉藤 博史 (大学院生、NGO経験者) 間杉 宗臣 (名古屋NGOセンター ボランティア) 古澤 幸雄 ((財) 日本国際協力センター 研修監理員) 大久保 晶光 (JICA/CBIC職員) 目的: 実体験に基づいた国際協力についての様々な考えを知る。 内容: グループ毎に講師と質疑応答を行う。	JICA/CBIC講堂
18:00～19:00 (60分)	夕食/自由時間 (CBIC食堂で研修員と懇談しながら、食事を楽しんで下さい。) ※先生方は、CBIC職員との懇談会を18:00から行いますので出席願 います。	
19:00～	自由時間/就寝	

平成12年8月23日（水）

時 間	内 容	場 所
～9:20	講堂に集合。（それまでに朝食を済ませてください。）	JICA/CBIC講堂
9:30～11:20 (110分)	まとめの会 目的：2日間の討議や体験をまとめ、国際協力について総合的に理解する。 内容：各参加者が1分間スピーチをする。 職員が適宜コメントする。	JICA/CBIC講堂
11:20～11:30	休憩	
11:30～12:00 (30分)	閉講式・写真撮影	JICA/CBIC講堂
12:00	解散	

宿泊場所：JICA中部国際センター(JICA/CBIC)
〒465-0094 名古屋市名東区亀の井2-73
TEL.052-702-1391 FAX.052-702-1397

貧困とは何？

◎本当の貧困者は？

貧困のイメージから私たちは、アフリカの人々を連想します。アフリカは経済的に乏しく、食糧不足などの問題を抱えています。しかし、アフリカの人々は、自分たちを貧困者だと思っているのでしょうか？・・・それは、恵まれた環境に生まれ、何不自由なく生きてきた私たちの同情やあわれみの目を見た、勝手な想像にすぎないと思います。

貧しくて困る・・・それはお金だけなのでしょうか？私たち、日本人は心が貧しくて困ってるのではないのでしょうか？つまり、お金はないより、ある方がいいかもしれないけど、お金持ちの人が必ずしも幸せだとは限らないと思ったのです。

○アフリカのある国



お金 心

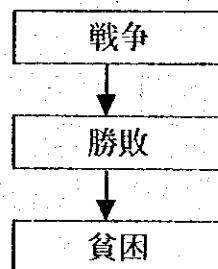
○日本



お金 心

◎戦争＝貧困

私たちが思う貧困を生む一つの原因は、戦争だと思います。戦争はお金、そして人の心をも失ってしまうだけだと思うからです。まず、この世から戦争をなくさなければ貧困は永遠に存在し続けるのではないのでしょうか・・・



◎私たちがする事

今、私たち日本人がすべき事の一つは、同情やあわれみの気持ちを持つのではなく、同じ世界に住む一人の人間として、対等につきあっていかなければいけないと思うし、お互いを尊重しあわなければいけないと思います。

	貧困のイメージ	貧困の原因
環境的貧困	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食べ物が無い→餓死 ・ 熱帯地方→水不足 ・ 学校、病院がない ・ 簡素で貧しい家 ・ 人口が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「不毛の地」のため食料不足 ・ 労働力、経済力、国力低下 ・ 列強による搾取 ・ 教育、知識の流入なし
失政的貧困	<ul style="list-style-type: none"> ・ スラム ・ 物乞い ・ 若い女性の売春→エイズ ・ 豪華な宮殿 ・ 貧富の差 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 帝国主義時代からの搾取 ・ 政治家が私腹を肥やす ・ 貧富の差→スラム化 ・ 追いつくための借金
内紛的貧困	<ul style="list-style-type: none"> ・ 難民 ・ 廃屋での生活 ・ 略奪 ・ 戦争後遺症 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 列強による国益優先による国境確定 ・ 民族、宗教等による対立 ・ 殺傷力の増した武器により力の均衡がくずれた

解決案	
人→資金、物資の配給 (直接) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 調査 → 調達 → 管理 → 配給 </div>	資金調達方法 (管理は UNCTAD) <ul style="list-style-type: none"> ・ GNP が 10 兆円以上の国は無償援助としてその 1% 以上 ・ 経常利益が 10 億円以上の企業は無償援助としてその 1% 以上 ・ 全ての国の公営・宝くじギャンブルの売り上げの 25%
現地に工場を設立→内需拡大 <ul style="list-style-type: none"> ・ 現地労働者に恒久的技術 ・ 労働者の生活環境への配慮 ・ 工場周辺的环境配慮 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 国境の見直し (民族、宗教への配慮) ・ 武器輸出の制限 ・ PKO, PKF, NGO による監視体制強化 	人材派遣法 <ul style="list-style-type: none"> ・ UNCTAD より主要 NGO へ要請 ・ 企業より技術者招へい

1. 「貧困」に対するイメージ

- ・食糧がなく、栄養不足でやせおとっていく。
- ・病院など施設が整っていない。
- ・学校に行けず、ずっと働いている。
- ・お金がない。
- ・家がない。
- ・水不足。

2. 「貧困」の原因

- ・十分な教育を受けていない。
- ・技術不足。
- ・機械等（道具）不足。
- ・開発するものがない。
- ・自分たちの国で、何をしたら発展できるか把握していないから何もできない。



3. 「貧困」の解決方法

- ・援助する（物、お金）。
- ・よく働く。

1. 「貧困」に対するイメージ

- ・色：赤（血の色）、茶（土色）
- ・相対的なもの
比較することによって存在する言葉
- ・「貧」であっても「困」でないところもある。
- ・ストリート・チルドレン

2. 原因

- ・政策による  人為的
- ・戦争、自然環境 
- ・人間の欲
=人より優位に立ちたいというエゴ？

3. 解決法

- ・知識不足の解消
- ・現地に合った、また合わせられる技術の提供

別添) 世界の難民・避難民数を記載した地図

『貧困』について

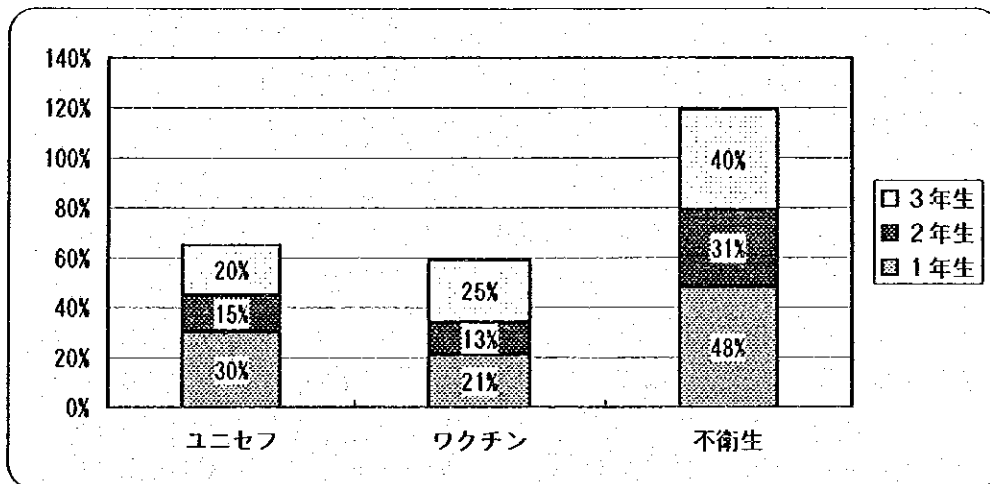
各学年2クラスずつで行ったアンケートの結果をまとめてみました。

(1年生80名、2年生80名、3年生80名、合計240名)

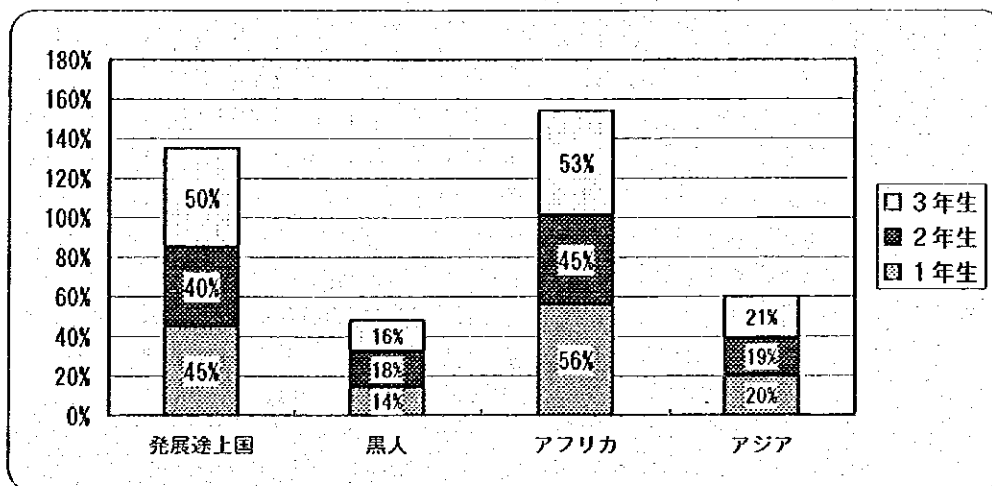
なお、外枠の形が□なグラフは物質的なもの、□なグラフは精神的なものを表しています。

1. 貧困に対するイメージ

	1年生	2年生	3年生
ユニセフ	30%	15%	20%
ワクチン	21%	13%	25%
不衛生	48%	31%	40%



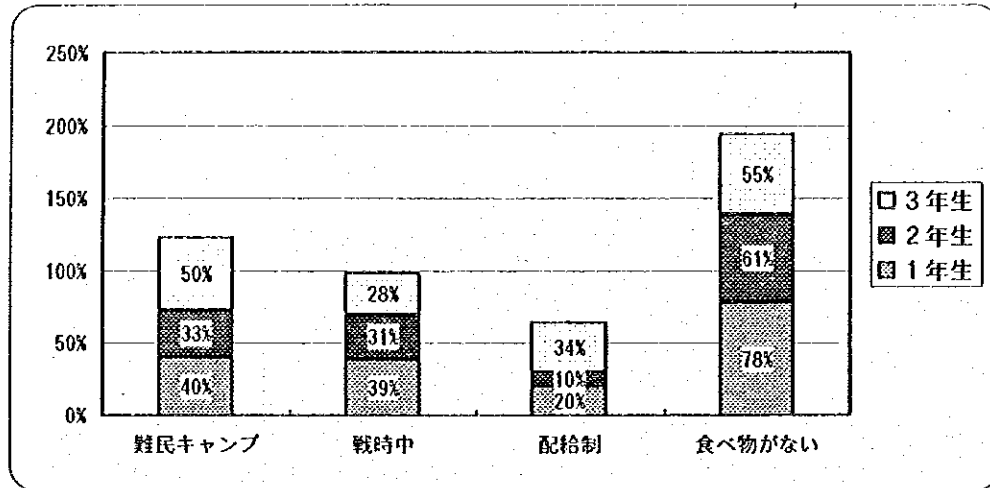
	1年生	2年生	3年生
発展途上国	45%	40%	50%
黒人	14%	18%	16%
アフリカ	56%	45%	53%
アジア	20%	19%	21%



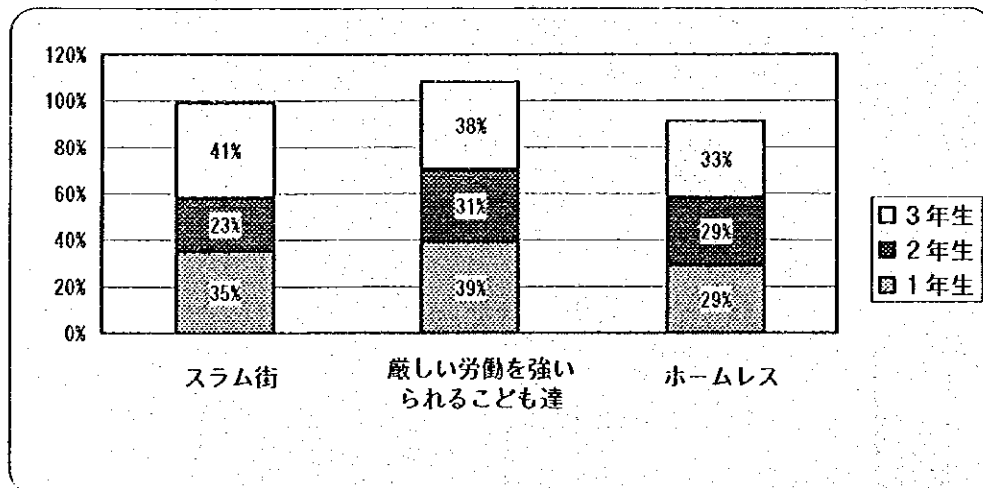
アジアにもアフリカにも発展途上国はあるが、貧困と聞くとアフリカをイメージする人が多かったらしい。

黒人と述べた人は意外に少なかった。

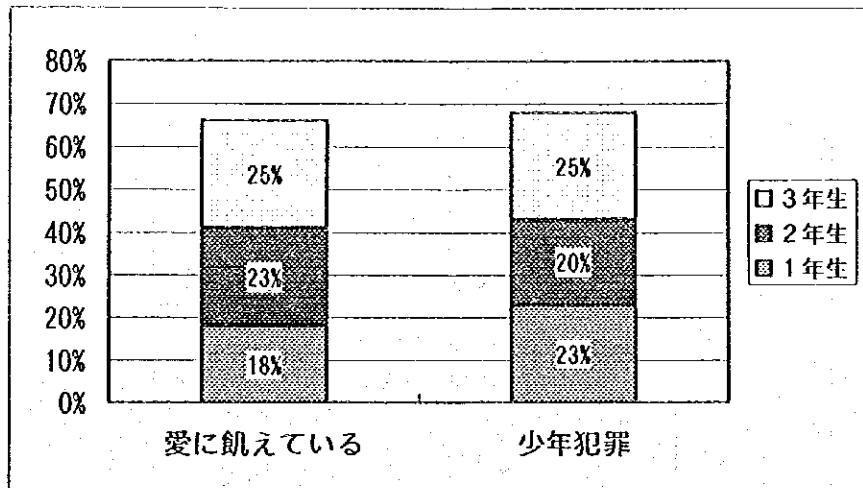
	1年生	2年生	3年生
難民キャンプ	40%	33%	50%
戦時中	39%	31%	28%
配給制	20%	10%	34%
食べ物が無い	78%	61%	55%



	1年生	2年生	3年生
スラム街	35%	23%	41%
厳しい労働を強いられることも達	39%	31%	38%
ホームレス	29%	29%	33%

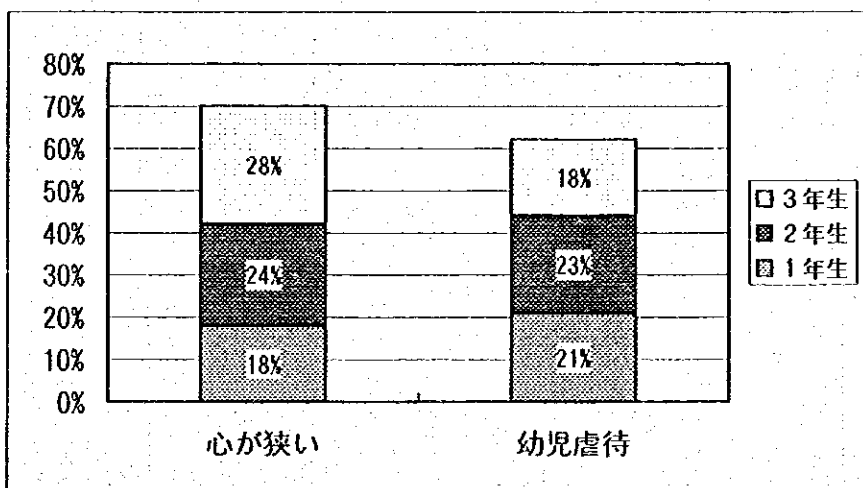


	1年生	2年生	3年生
愛に飢えている	18%	23%	25%
少年犯罪	23%	20%	25%



近年、後を絶たない少年犯罪。精神的貧困が進んでしまったのだろうか・・・

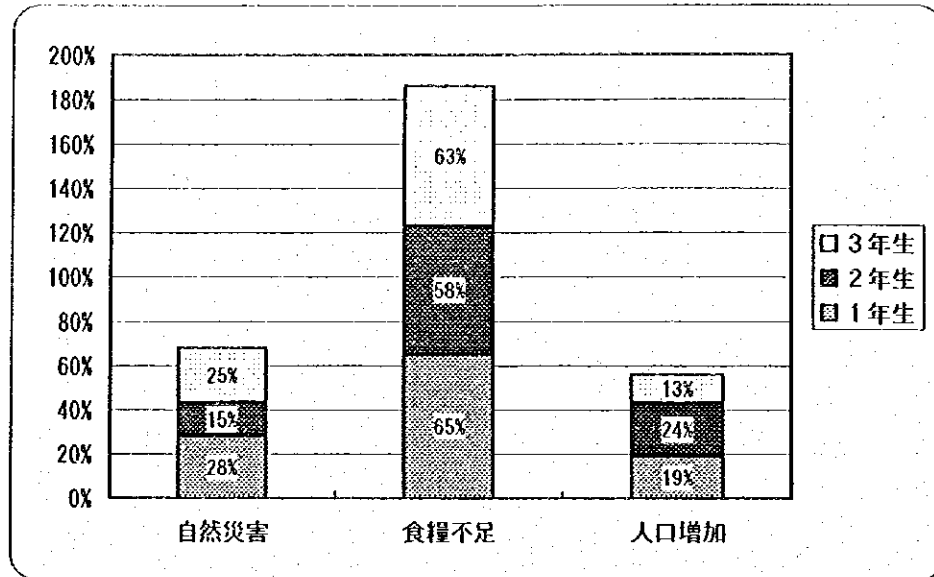
	1年生	2年生	3年生
心が狭い	18%	24%	28%
幼児虐待	21%	23%	18%



やはり、「貧困」と聞くと飢餓に苦しむ子供たちの写真が頭に浮かぶのかもしれない。

2. 「貧困」の原因

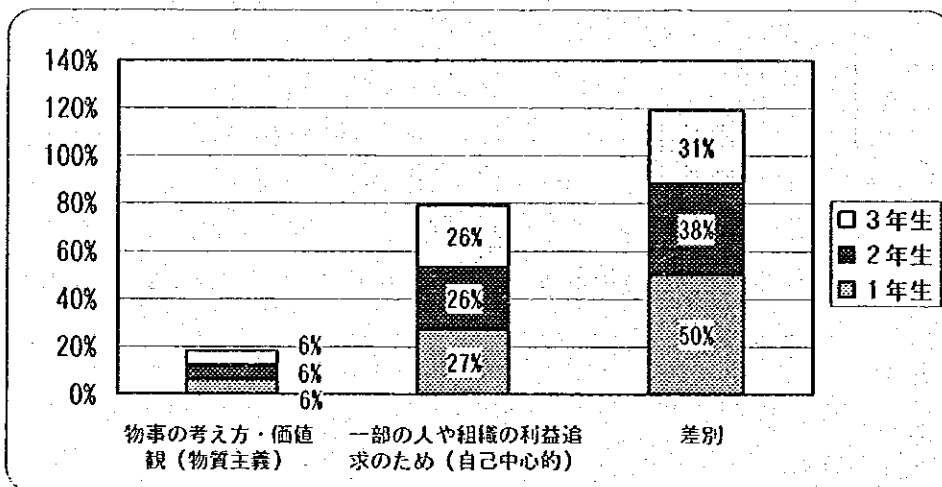
	1年生	2年生	3年生
自然災害	28%	15%	25%
食糧不足	65%	58%	63%
人口増加	19%	24%	13%



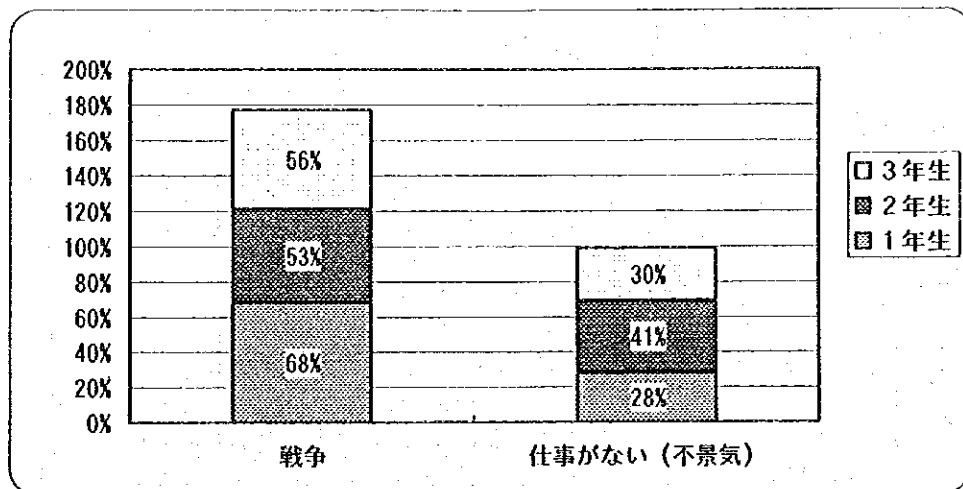
平気で食べ物を捨てる人もたくさんいるのに・・・

	1年生	2年生	3年生
物事の考え方・価値観（物質主義）	6%	6%	6%
一部の人や組織の利益追求のため（自己中心的）	27%	26%	26%
差別	50%	38%	31%

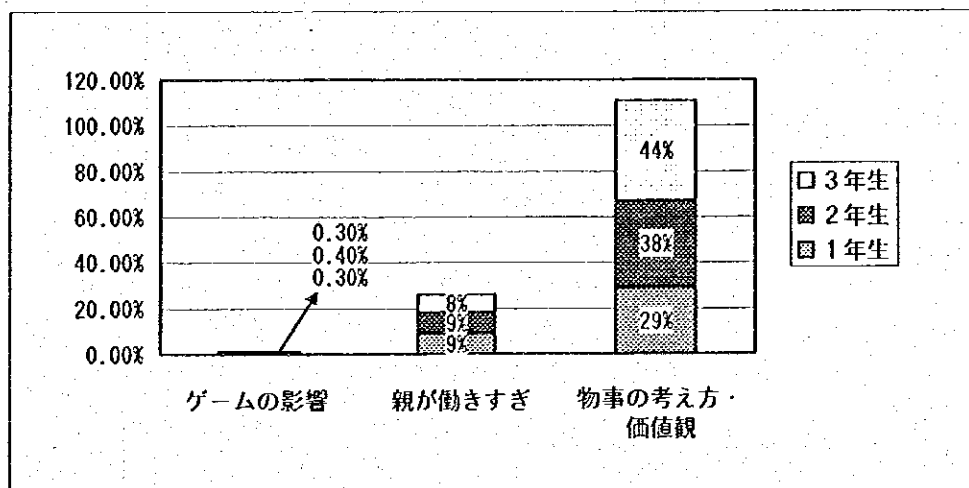
貧困の原因として「差別」を述べた人が非常に多かったことには驚かされた。



	1年生	2年生	3年生
戦争	68%	53%	56%
仕事がない (不景気)	28%	41%	30%

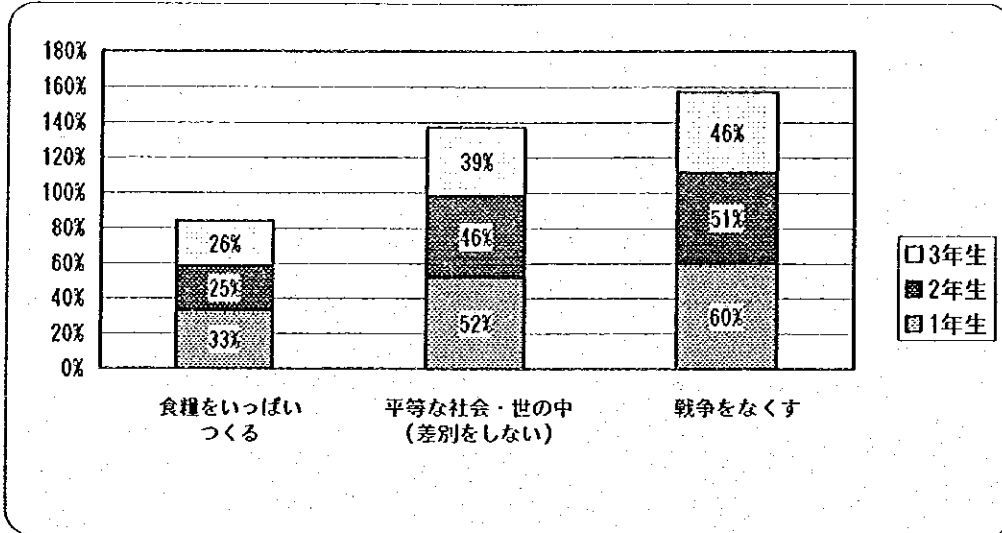


	1年生	2年生	3年生
ゲームの影響	0.30%	0.40%	0.30%
親が働きすぎ	9%	9%	8%
物事の考え方・価値観	29%	38%	44%



3. 「貧困」の解決方法

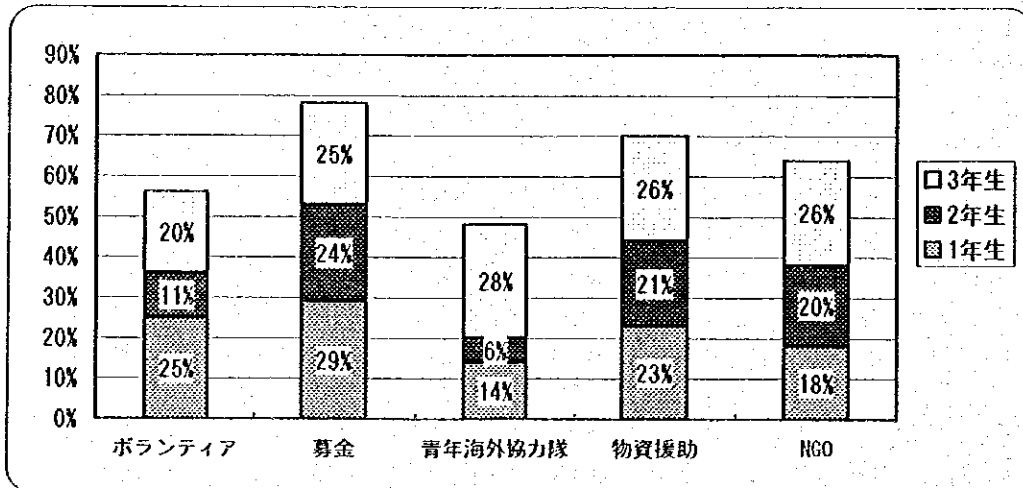
	1年生	2年生	3年生
食糧をいっばいつくる	33%	25%	26%
平等な社会・世の中 (差別をしない)	52%	46%	39%
戦争をなくす	60%	51%	46%



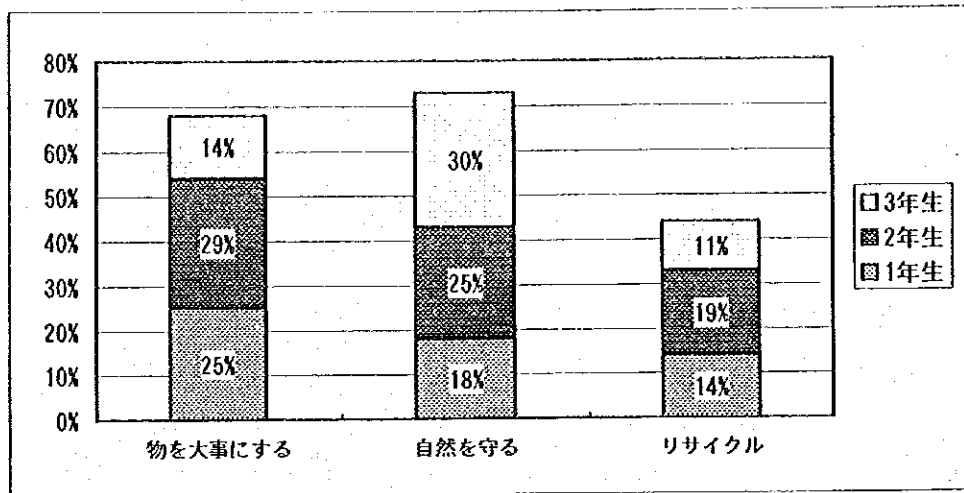
確かに、戦争のために難民キャンプを強いられ、苦しい生活を送っている人々は
大勢いる。だが、戦争のない所には貧困はないのだろうか・・・！？

	1年生	2年生	3年生
ボランティア	25%	11%	20%
募金	29%	24%	25%
青年海外協力隊	14%	6%	28%
物資援助	23%	21%	26%
NGO	18%	20%	26%

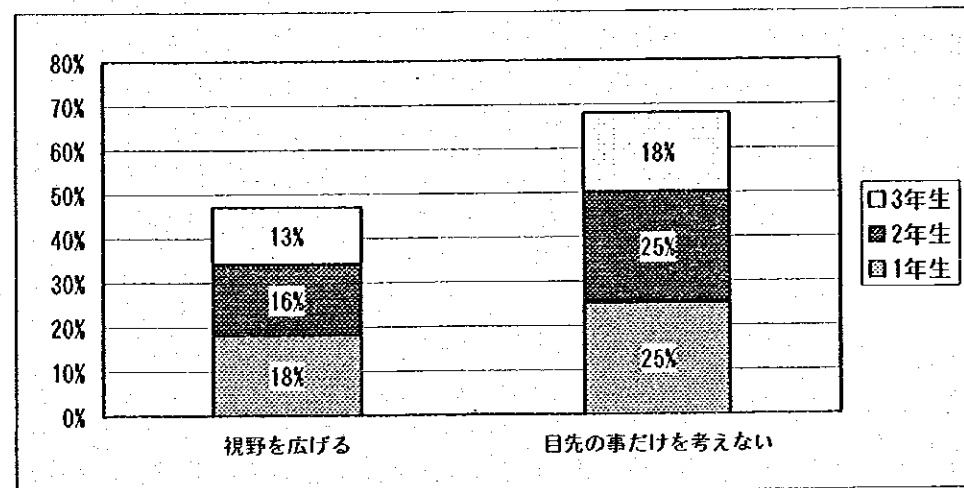
「募金は大切だ」と述べている人は非常に多いが、「自分は募金活動に積極的に
参加している」と自信を持って言える人はあまりいないのではないかな。



	1年生	2年生	3年生
物を大事にする	25%	29%	14%
自然を守る	18%	25%	30%
リサイクル	14%	19%	11%



	1年生	2年生	3年生
視野を広げる	18%	16%	13%
目先の事だけを考えない	25%	25%	18%



先進国の貧困と発展途上国の貧困

イメージ

- ・ガリガリにやつれ、骨と皮だけになり、泣いている子供達の姿（アフリカなど）
- ・貧しい国は、かつて植民地だったり、暑く比較的資源が多い国々に見られる。

「心の貧困」のイメージ

- ・発展途上国と先進国では、先進国の方が心が貧しいのではないだろうか。

原因

○発展途上国における食料面での貧困

1. 頻繁におこる戦争
2. 度重なる日照りや干ばつといった悪環境
3. 爆発的な人口増加

○先進国における精神面の貧困

1. ものに埋め尽くされた生活
2. 我儘でき、他人の気持ちを考えられる人間の減少

解決方法

考えられること

- ・食料の援助
- ・教育の普及

しかし、輸入するお金もなく、援助だけに頼るのは不安定である。教育の普及についても、今日の食べ物に困っている人にそんな余裕はないはずだ。私達には、確かな解決法は分からない。まずは貧困について十分知ることから始めなくてはならない。

0

「心の貧困」

これは、心の問題であり、確かな解決法はない。これについても、真剣に話し合う必要がある。

私たちの貧困のイメージ

〈地域〉

- ・ 南半球 ・ 中国北部奥地 ・ 北朝鮮 ・ 乾燥地帯

〈生活の様子〉

- ・ 地面で寝てる ・ はだし ・ はだか ・ アカだらけの黒い肌
- ・ 毛布の配布 ・ 衣食住がない ・ ポロぎれの洋服 ・ 脱脂粉乳
- ・ 土を食う子供 ・ ポロ小屋 ・ ゴミ山

〈貧困地域の現状〉

- ・ 栄養不足 ・ ヤミ市 ・ ハーレム ・ 犯罪 ・ 黒人どれい
- ・ 薬物横行 ・ ストリートチルドレン

〈主な国〉

- ・ エチオピア ・ バングラデシュ ・ インド など・・・

〈イメージ〉

- ・ 戦後の日本 ・ 下町 ・ かわいそう ・ 子供

おしん
家なき子

〈行われている政策〉

- ・ ユニセフ ・ ワクチン

もっと恐い貧困は？

語彙の貧困

語句を知らない
会話が貧しい

発想の貧困

イメージがわからない
頭がかたい

心の貧困

すぐ切れる
簡単に人を傷つける

自分をうまく表現できないこと

【青年海外協力隊員の事例研究】

野口隊員は青年海外協力隊員としてネパール国に保健婦として派遣されました。野口隊員の任地は首都カトマンドウより飛行機で1時間ほどのポカラ（世界的にも有名なトレッキングの中継地方都市）からバスで一日移動しバグルンまで行き、そこから徒歩で3日かけてやっと到着するドワラ村です。ドワラ村は、人口300人程度、標高2000mに位置し、条件の悪い中細々と階段状の水田を耕して稲作で生計をたてています。野口隊員の仕事は、ドワラ村にあるヘルスポスト（保健所の小さい出張所）に勤務しながら、周辺の村をまわって地域住民の衛生教育、衛生環境の向上、そして医療相談等を行うことです。

ドワラ村に来てからの4ヶ月は言葉があまり通じないのでほとんど仕事にならず、生活するだけで精いっぱいでした。日本の駒ヶ根訓練所（日本を出発する前に研修を行うところ）とカトマンドウでネパール語をみっちり勉強しましたが、ドワラ村で話される方言は全く別の言葉と言ってよく、言葉が通じない焦燥感にかられながらも、毎日子供たちを教師として言葉の勉強を続けました。

半年経った頃、努力の甲斐があって最低限度の言葉が通じるようになり、本来の保健婦としての仕事ができるようになりました。そんなある日、野口隊員は、ポカパニ村を訪れて衛生教育を行いました。農作業から戻った村人を集めて、コレラなどの感染症の説明をし、トイレがないポカパニ村の問題点を説明しました。ポカパニ村は地形的な制約から、村の集落が山の斜面に沿って縦に広がっており、下部に位置する農民からコレラや赤痢による下痢症状が頻発しています。野口隊員は、トイレを作って飲料水、生活用水の汚染を防ぐ必要性を覚えてたての方言を使って力説しました。下痢によって生命をなくす乳児をなんとか救いたい一心で、いつもより雄弁に説明ができました。ところが、村人の中で村長格のシャミール氏はこう言いました。「あんたは、わしらの村にトイレが必要だと言うが、わしらは本当に貧しい村で、痩せた山肌を精いっぱい耕してわずかばかりの米を作っている。食うものも十分食えないのに、シリから出すものなことなど考える余裕はない。」

設問1：この様な場面に接した場合、あなたならどのように対応していきますか？

野口隊員は物事がスムーズに進まないのが当然だと、焦る気持ちに言い聞かせ、我慢強く地域の衛生状態を調査し、特に地域住民の栄養状態を集中的に調査しました。調査地域は交通の便が悪く、雨期の最中だったので、ぬかるむ泥道や橋のない溪流を何度も歩いて踏み越えながらの調査となり、3ヶ月半の時間を要しました。それらの調査結果をネパール語にて取りまとめ、ポカラにある地域保健事務所に提出しました。その報告書の中では、ドワラ村周辺の36村に必要な公共トイレ74ヶ所と安全な生活用水の確保のための塩化ビニールパイプ簡易給水システムの建設に必要な資材の現物支給を申請しました。カトマンドウの保健省にも健康診断を兼ねた隊員総会で上京した際に足を運び、簡易給水設備とトイレ建設の必要性を訴えました。しかし、保健省の担当職員は、「貴方の報告書は良くできているが、我々には資金が全くない。私の給料でさえ毎月2千円なのだ。貴方は協力隊員として政府職員よりはるかに高い手当をもらっていて、養う家族もいないではないか。この報告書は、外国人のボランティアが現地の政府の事情を理解せずに、理想を計画したに過ぎないのではないか。」と言いました。野口隊員は、現地の人々が苦しんでいる現状を説明したが、予算が無いの一点ばかりで話は全く進展しませんでした。

野口隊員は、現地の住民やドワラ村の子供たちのことを考えると悲しさと苦しさと胸がいっぱいになりました。カトマンドウで宿泊している隊員連絡所に戻っても食欲がなく、1人で泣き続けました。そんな野口隊員をみて、ネパール滞在が3年目になる稲作隊員の斉藤隊員は、部屋にこもりっきりの野口隊員に「どうしたんだい」と声をかけました。遅しく日焼けして真っ黒な顔に無邪気な笑顔で声をかけられて、野口隊員は少しづつ経緯を説明しはじめました。斉藤隊員は、誰が見てもネパール人としか思われず、ネパール人でさえいつもネパール人だと思えるほど現地に適応していました。

野口隊員から話を聞いた斉藤隊員は、次のようにアドバイスしました。「何も困ることはない、ネパール政府に金のないことは常識ではないか。どうしても簡易水道とトイレが必要ならば、日本大使館の小規模無償協力（草の根無償として日本政府が実施している国際協力。外務省が担当している。）を打診したらどうだい。また、ポカパニ村がそんなに貧しいのなら、灌漑の状況を今度見せてもらいたいもんだ。隊員総会が終わったら、ポカラまで行ってトレッキングをする予定なので、出来れば野口さんの任地を訪問したいな。」

設問2：保健省の職員は野口隊員に対してどのような感情を抱いていると思いますか？

設問3：野口隊員と斉藤隊員の考え方の違いはどのようなもののでしょうか？

設問4：草の根無償が可能だとして、それは村のためになると思いますか？そして援助を導入する時、どの様な点に配慮しなければ簡易水道、トイレが維持出来ないか考えてみましょう。

野口隊員は、在ネパール日本大使館の石井書記官に面会し、草の根無償資金協力の仕組みと申請方法を伺いました。石井書記官は、野口隊員の話に熱心に聞いてメモを取り、申請するために必要な、詳細見積とディストリクト（郡）の開発委員会の文書を取り付けるようアドバイスしてくれました。野口隊員と斉藤隊員は、隊員総会が終わったあとポカラに行きポカラからドワラ村まで3日間歩いて行きました。村人は野口隊員が久しぶりに帰ってきて大喜びです。また、ほとんどネパール人のような斉藤隊員もすぐに村人たちと打ち解けて、人気者になりました。野口隊員は、村人たちに簡易水道と公衆トイレの建設計画を話し、ネパール政府の資金は得られなかったものの日本政府の草の根無償資金協力が得られる可能性があることを説明しました。ドワラ村周辺の36村で組織される開発援助委員会の会合を開いて、簡易水道と公衆トイレの建設計画の申請について話し合うこととなりました。翌日、斉藤隊員はポカパニ村に向けて出発し、階段状水田の灌水状況を調査することとなりました。ポカパニ村の周辺は土地が痩せていて極端に木が少なく、村人が料理用の薪を採取するために水田周辺の木を切ってしまうっており、そのために土壌が流失し、稲作にも影響を与えていることがわかりました。斉藤隊員は、夕方に村人を集め、水田の上部と周囲に植林する必要性を教えました。苗はマメ科の在来低木をポカラにある農業省ポカラ支所から取り寄せることとなりました。また、斉藤隊員は水田面の高低が一定ではなく灌漑用水が有効に利用されていないことを指摘しました。日本で行っているシロカキを明日から、斉藤隊員が指導することとなりました。「トレッキングはどうやら今年は出来そうもないけれど、こんなに自分の技術が村の人たちに喜ばれるなんて、うれしいことだね。」ほぼ1週間滞在した斉藤隊員は、村人たちに旅立ちの儀式をしてもらいながら、強い地酒ロキシーで顔を赤くしながらドワラ村を去って行きました。

設問5：自分の仕事が人の役に立つことの充実感について、貴方はどう考えますか？

設問6：将来貴方が仕事をする場合、どんな基準で仕事を選びますか？

任期をあと数カ月残すのみとなった野口隊員は、地域の簡易水道と公共トイレ建設を無事完成することが出来ました。施設の完成式には大使館の石井書記官にも出席してもらいました。付近の村人も大勢ドワラ村に集まり、盛大なお祝いが行われました。ちょうど収穫が終わったあとに行われた完成式は本当に楽しく、野口隊員は自分のやりがいのある仕事ができ、幸せで心が一杯でした。

そんなある日、8167mのドワラギリ峰が美しく見渡せるレテ村を巡回した野口隊員は、左足に腫瘍があり激痛に苦しんでいる32才の婦人から相談を受けました。腫瘍は明らかに悪性でかなり長い間ほおっておいたことが明白でした。左足の皮膚はほとんどただれて2次感染しており、レントゲンを撮らなければはっきりしたことは解りませんが、どうやら悪性腫瘍が骨まで達しているようです。早急に手術をする必要があると判断した野口隊員は、ポカラにあるキリスト教系のNGO（非政府団体）が経営している病院に行って手術をしてもらうようにアドバイスしました。するとその婦人は静かに言いました。「あなたは私が手術を受けるようにおっしゃいましたが、私がポカラに行っている間、誰が私の家族のために薪を集めたり、水を運んだり料理をするのですか？私の家族は貧しくて私の夫も子供も全員が忙しく働いています。誰も私の代わりに私の仕事をする余裕はありません。もし手術をした結果、私が歩けなくなってしまったら、私は一命を取り留めたとしても働くことが出来なくなります。そうしたら、私の家族は歩けない私をかかえて全員が困窮してしまいます。もし私がこのまま病気で死ねば、私の夫は再婚することが出来、その新しい婦人が私の夫を助け、私の子供を育ててくれます。私は毎日神様にお祈りをしていますので、もし天命ならいつ死んでもかまいません。どうも有り難うございました。」野口隊員は、返す言葉もなく、心を打たれました。ビタミン剤と鎮痛剤を申し訳程度に渡して、左足をひきずりながら重い薪を担いで去っていった婦人の後ろ姿を、いつまでも見つめていました。

設問7：ネパールの国民1人当たりの国内総生産（GDP）は、208ドル（23,920円）です。ちなみに日本の国民1人当たりの国内総生産（GDP）は、30,120ドル（346万3千800円）です。ネパールでは1年間で1人当たり2万4千円で生活していることとなります。自分のお小遣いと比較してネパールの農村での生活について話し合ってください。

このケーススタディーは一部岩村昇氏（JOCS）及び川原啓美氏（アジア保健研修財団）の資料を参考にしました。

名古屋市立桜台高等学校2年 阪田 真崇
実体験プログラムを終えて

まず最初に、この体験に参加できて本当に良かったです。参加の前まで、「国際協力」という活動がどんなものなのか、まったくと言っていいほど知りませんでした。名前程度は聞いた事はあったけど、深く考えることもしませんでした。だけど、この体験の話がきて、いざ参加してみると、「貧困」というテーマで、考えるということで、普段の生活ではできない考え方、又、おもしろさや色々な人の意見など、学校では恥ずかしくて言えない様な事があり、とても新鮮でした。こういうのを考えるのは非常に楽しかったし、意識の中に浸透しました。そして僕としては、国際協力への見方が、というよりも、国際協力その物に対する思いが変わったと思います。今後このような機会があれば、是非参加したいし、又、その他自分にできる事があれば積極的になっていこうと思います。

次に、この体験で、多くの人と出会え、そして話が出来たのが良かったです。研修員の方とは食事をしながらの交流でしたが、僕は英語が話せないのに、身振り手振りでしたが、こちらの意志は何となく伝わっているようでしたが、むこうの言葉が分からないのに、壁を感じたのと共に、相手の気持ちを本当に感じとろうとしたか、と疑問を抱きました。高校生の人達とは、本当に良かったです。考える時は多彩な意見がでたり、自由時間では、世間話から夢の話、恋のお話など短い時間でもすぐ打ち解けられて、仲良くなれて、楽しい楽しい時間でした。

国際協力は、まだまだ身近な存在ではないようです。人々は自分に直接影響、関心が無いものには、手を出さないものだと思います。そういった意味でも、このプログラムは続けていただきたいと思うし、もっと幅広い層へのアプローチもお願いしたいです。国際協力によって一つでも幸せが増えますように。

名古屋市立桜台高等学校2年 鈴木 友野
「国際協力」について

私たちができる国際協力は発展途上国の現状を知ることだと思います。

このプログラムを体験する前の私は国際協力や発展途上国について想像だけの知識ばかりで現実を知らなかった気がします。だから同情だけで募金をするなど、一番大切な相手の気持ちも考えず行動し、満足していました。

そして今、プログラムを終えてみると私はたくさんの事を学んでいました。その中でも私の中で一番印象に残っているのは発展途上国の人々の気持ちでした。彼らにも私たちと同じようにプライドもあり、意志もある。暮らしている環境がいくら違っても、同じ人間であり、そして同等につき合っていかなければならないと思いました。すごく当たり前の事なのに途上国の人々とのやりとりの現状を知るまで気付くことができませんでした。

「国際協力」と聞くと、カッコいい言葉で何か立派な事を…と思いがちだけど、私は自分で満足でき、かつ今の自分にできる事を精一杯やっていきたいと思っています。

今回のプログラムで自分の知識の無さを自覚したので、興味が出てきたこの機会に少しずつ調べ考えていきたいと思っています。これも一つの国際協力と思い…。

名古屋市立桜台高等学校2年 高見 佳代

JICA 研修を終えて

私はこの研修を終えて変わったことが2つあります。

一つは貧困に対する援助のことです。前までは、もう少し救援物資を送れないのか、とか、お金を送れないのか、と思っていました。しかしこの研修によって援助できることは、それだけではないと思いました。

確かに、物資やお金は必要かもしれませんが、現地で技術指導をすることも大切だと思いました。

しかしそれにもいろいろな苦勞があると、ケーススタディ等でわかりました。言葉の壁というのは本当に大変だと思いました。

研修生との食事の時でも、しみじみと伝わってきました。自分ももっと英語でコミュニケーションがとれるようにしたいと思いました。

もう一つは発展途上国の人に対する気持ちです。以前は『かわいそう』とかそういう考えしかありませんでした。今でも少しはそういう気持ちもありますが、少し『うらやましい』という気持ちにもなりました。

メンタル面でのあたたかさは、本当にうらやましいと思いました。そしていつか、それらの国へ行きたいと思っています。

そして最後に…この研修によって得たものはたくさんありますが、やっぱり私は友達が

たくさんできたことが一番です。

二泊三日の研修でしたが、とても多くの友達ができました。同じことに関心を持った仲間と語り合えたことは、とてもいい思い出になりました。できればもう一日欲しかった…。

もし来年、参加のチャンスがあれば、是非参加したいです。そしてこれからは、積極的に国際協力に関する活動に参加したいと思いました。

名古屋市立桜台高等学校2年 野口 愛 国際協力について

私は以前から国際協力に関心があり、青年海外協力隊などにあこがれ、将来、自分もそういったボランティア事業に参加できたらいいな、と思っていました。しかし、私は“国際協力”についてよく調べもせず、外面的にしか見ていませんでした。このプログラムを通して、自分の考えの甘さを思い知らされ、“国際協力”は様々な状況が絡み合い、複雑でとても難しい問題であると痛切に感じました。

私はこの難しい“国際協力”という問題にこれから、なんらかの形で関わっていききたいと思うけれど、不安は募るばかりです。でも、ケーススタディや国際協力に関わる方々とお話をしたことで、周りの人から影響を受け、視野が広がりました。みんなで同じテーマについて考えてもいろいろな意見が飛び交うように、国際協力についても、決して答えは一つではないと思います。様々な角度からものを見る目を養い、自分なりに考え、行動につなげていきたいです。

そのためには、日々の学習を怠らず、知識を増やすことが大切だと思います。コミュニケーションをとる時でも、英語力は必要になるだろうし、日本や自分自身について問われても答えられるよう、豊富な知識を身につけたいです。でも、コミュニケーションをとるのが苦手な私の場合、まずはこれを克服し、ポジティブな人間になることが第一です。

このプログラムに参加したことは、私の国際協力への始まりです。この第一歩を大切に、身近にできるボランティアなどを通して国際協力に関わっていききたいです。そして、この体験を通して学んだことを多くの人に伝え、みんな一人一人が協力し合っていけたらいいな、と思います。

私は人が好きです。笑顔が好きです。自然や動物も大好きです。だから始めたい、今、

ここから…。

愛知県立平和高等学校2年 山岸 健史
不完全健史のレポート

私が今回のプログラムに参加した理由、それは、「いつもとは違う夏休みを過ごしたい！」という簡単だが、私を動かすには十分な思いがあったからである。案の定、英語の勉強や、貧困についての提出用紙と発表の時に読んだ原稿の作成の忙しさ、知らなかった言葉を知っていくという面白さによって、いつもとは違う夏休みの幕は開けられた。

プログラム当日、暑さに体力を奪われながらも、中部国際センターになんとか到着。そして、日程通りに事が進み、自己紹介へ。私は、「名前と呼んで下さい。」と言ったが、誰も名前と呼んでくれなかった。やはり、親しみやすさを優先して、「けんちゃん、と呼んで下さい。」と言った方が良かったかも…と、後悔している（神田先生は、ビンゴの時にこの事を話したらけんちゃんと呼んでくれた唯一の人。）。その後の発表会では、「他校の発表は柔らかいのに、俺達のは固いなあ。」と思いました。

二日目、国際協力の時間。講師の方々は、自分のしている事を熱く、生き生きと語ってくれた。今の自分には、うらやましく感じ、私も将来は他の人に熱く、生き生きと語れる職に就きたいと思いました。18時から自由時間だったので夕食を外で買って食べ、遊び場を見つけた私は、山中君を誘って行き、ビリヤードを金川先生の指導の下で遊んでいると、西島さん、綾部さん、松宮さん、薫森先生が途中で加わり、とても楽しいビリヤードになりました。

最後の日は、スピーチの時に予定外の笑いがとれたので、それだけで満足だった。

この三日間のプログラムで、私が考え、得たものは、「やりたい事があったらやってみる。それが間違いかは、未来が教えてくれる。」という言葉と、「困っている人を見たら、その人の力になる。」という考えです。他の人にとっては当たり前的事かもしれない。けれど、これらは私が見つけた大切な二つの成果です。両方とも勇気の要る事ですが、少しずつ行動に移していきたいです。

そして、三日間しか会っていないのに、時が経つにつれ、参加者の方々が、恋しくなる。またどこかで会えたら良いなあ、と秋の月夜に思う私であった。

JICAに参加して

この三日間を過ごしたことは、すごく自分のために良い経験だったし、参加してよかったと思います。また準備では、何も解らないところから始まり、徐々に貧困の問題が古代にもあったということなどを知りました。英会話の練習もして大変苦勞しましたが、自分なりによくがんばったと思います。

まず最初の日に、研修員の人たちと英語で会話ができ、自分の英語が通じる場面も度々あったけれど、通じない場面も多くありました。解らない単語はあまり無かったけれど、発音など大変難しかったし、コミュニケーションが大事ということに気付きました。また、二日目には消防学校へ行き、実際の研修風景が見られ、訓練施設の地下に入った時は、すごく暑くて汗が止まりませんでした。あと、国際協力に携わった人の体験談を聞いて、いろいろなことが課題にあるんだなあと思いました。

次に、ケーススタディでは、いつも最後に意見を述べていたけれど、もっと主張するべきだったと思います。ケーススタディの設問6では、「人の笑顔が見られるような職業にきたい。」と、発言して、自分でも驚きました。

最後になりますが、JICAの職員の人たちは、いろいろな苦勞をしているのだなあと思い、自分ももっと勉強して、いろいろなことに挑戦したいと思っています。二日目の午前中はいろいろ迷惑をかけてしまい、申し訳なかったと思います。病院につれていってくれてありがとうございました。あとケーススタディで、一緒に勉強していた人たちにも迷惑をかけてしまい、申し訳なかったです。他の高校の人たちとお話やビリヤードなどができて良かったと思います。この三日間は、いろいろな意味で良かったと思います。あっという間に終わってしまいましたが、ビリヤードも含め楽しかったです。そして貧困の適切な解決方法はないのかもしれないけれど、一人では解決できないので、みんなが協力することが大事だと思いました。今後は、貧困のことをもっと具体的に知り、英語も勉強していきたいです。

これをステップに…

今回の体験を終えて、自分自身大きく成長した気がします。私はどちらかというと、先

進国のアメリカやイギリスといった国々に興味があったので、途上国の事はあまり知りませんでした。でも「貧困」というテーマでいろいろ調べていくうちにわかった事や、知りたいと思った事がいくつかありました。気づかないうちに自分の中で発展途上国に興味がわいていました。

私がたくさんのお話を学べたのは、この3日間だけではありません。参加するにあたっての準備段階から始まっていました。貧困の歴史をもう一度見なおしたり、イメージはたくさん出るけど、解決案がなかなか思いつかずにみんなで考えたり、どうやったら見やすくまとまるかを悩んだり、貧困以外にもいろいろ勉強出来ました。

この3日間は、私にとって全部がとても貴重な体験だったので、一つ一つかいつまんで書いていきたいと思います。まず、2日間にわたって行われたケーススタディでは、自分の意見に同意してくれる人がいる時もあれば、圧倒されるほどのたくさんの人からの反対意見を言われた時もあり、自分が言う一言一言に対して返ってくる反応が様々で、これを言ったら、みんなからはどうやって返ってくるのだろうと、みんなの反応が楽しみになっていました。

次に研修員との交流食事会では、おいしい料理に囲まれながら、いろいろな国の研修員の方々とお話をすることが出来ました。中でも、インドネシアの方とお話した時のことです。私は以前にインドネシア語を習ったことがあったので、インドネシア語で「こんにちは、お元気ですか。」と聞いてみました。そうしたら彼は、インドネシア語で「はい、とっても」と答えてくれて、私はとてもうれしくなり、その後もいろいろが国の人と話し、気づいたら思った以上に英語が聞き取れていて、自分でも驚くほどでした。

最後に、国際協力に携わる人と話そうということで、一番印象に残っているのは、NGOセンターと青年海外協力隊の方の話です。写真を見せてもらい、とても驚きました。イメージ通りの写真でしたが、目の前にいる人とぼっこりふくらんでやせた子供と一緒に写っていると、なんだかとても現実味がありました。5人の方々の話は、テレビや本で見るよりも遙かに身近に感じる事ができました。

この3日間で、国際協力についての知識のなさを感じ、そして私たち高校生にできる事はなんだろうと考えさせられました。だから私は、これで終わりではなく、これが始まりだと思います。この3日間での体験や学んだ事を他の生徒に伝え、少しでも国際協力に興味を持つ人が増えたらなあと思います。

自己改革の第一歩

私は、今回 JICA プログラムに参加しなければ、様々な人々が貧しい国に対して、あらゆる形で協力している事を知ることはできなかつたろうし、関わりを持つ事もなかつたろうと思います。

私は最初、貧困に対しての知識が全くない状態から始めたので、準備はとても大変なものでした。三日間のために、たくさんの時間を費やして、少しずつではあるが知識を増やす事ができました。その準備期間は自分にとってとてもプラスだったし、大変ではあったけれどそれがあったので、三日間をより学びやすく理解しやすいものにできた、と思います。三日間のプログラム中には、研修員の方々と英語で話す時間が設けられていたので、準備期間中に、学校の外国人教師に熱心に英語を教えて頂きました。そのおかげで英語力、特に聞き取る力は最初よりも明らかに身につけ、研修員の方々の話している事が分かった時は、自分の英語力が向上しているんだなあ実感しました。

プログラム中は、議論をする場面がとても多かったので、最初はとまどう時もあったけれど、多くの人の意見を聞く事により、知識を深めていく事ができたとし、視野を広げる事ができました。

全てにおいて、初めての事ばかりだったけれど、手探りをしながら様々な事に取り組み、その結果国際協力を身近なものに感じるようになったし、関心を持つようになりました。

このように私が学んだ事や得たものを、多くの人に知ってもらいたいです。私が今回国際協力に関わる事ができたのは、あるきっかけやチャンスが入り交じってできたもので、人はそのようなきっかけみたいなもので出会ったり、一生出会わなかつたりすると思います。だから、今度は私がそのきっかけになって、なるべく多くの人に伝える事ができればいいし、ただ伝えるだけでなく、まだ私の知らない事が国際協力の中にはたくさんあるはずだから、同時に知っていくために JICA などの活動にもっと目を向けていきたいと思いました。

今回の体験を通して

僕は今回の体験で非常におどろいたことがあります。それは、僕より年下の生徒の人達が、とても難しい意見を言いあっていたことです。

なぜおどろいたかということ、僕の周りの人は、世界の情勢についてとか、途上国の貧困についてなど討論することが一度もないからです。僕自身も学校の人とそんな会話ができるなんて思ってなかったから、他の学校の生徒の人の意見には非常におどろきました。

このようにおどろいたこともありましたけど、僕は緊張した時もありました。

それは、初日の夜の食事の時です。いろいろな国の方とフリートークの時に、マレーシアのアリさんという方と二人きりで話をしていたときのことで、僕はそれまで外国の方と二人きりで話す機会が一度も無かったために、英語に自信がなかったのです。

ところが実際に話してみると、意外や意外、結構英語が話せたのです。ただ一つ大変だったのが、父の職業を聞かれたときに、父の職は大工なんですけど、「大工」という単語が出てこなくて、ジェスチャーで説明したらアリさんはわかってくれたのでとても助かりました。

今回の体験は、本当に勉強になりました。それは、ケーススタディや二日目のNGOの方や協力隊の方などの話を聞いた時です。とくに二日目の話を聞いた時は、いろんな方がいて、いろんな立場からの話を聞いたのですが、皆さんの所属している所ややっていることが多少違って、最終的な目標は皆同じなんだと思いました。

本当にあっという間に過ぎた三日間でしたが、少ない日数の中でたくさんのことを学べた気がします。

また機会があれば、センターへ行きたいです。職員の方本当にありがとうございました。

岐阜県立揖斐高等学校3年 高橋 弥生

私は、初めの方では、国際協力事業団の人たちが、実際にどのようなことをしているのかあまりよく分からなく、先進国の人たちはどんな生活をしているのかということもよく分かっていませんでした。でも、この研修を通して、先進国の人たちは家族のみんなが働いて、

助け合ったりすることなどがとてもよく分かったし、国際協力事業団の人は、日本語や、農業を教えに行ったりして、みんながそれぞれいろんな所に行って、活動をしていることがとてもよく分かりました。

途上国の人たちは、自給自足の生活をしていて、日本とは違い、とても少ないお金で生活しているのに、私たちはご飯を簡単にすてたりして、とてもぜいたくしているのかなと思いました。

私は、途上国のような、何があるか分からないような所に絶対に行きたくないと思っていました。だけど研修の2日目でやった“国際協力に関わる人と話そう”というので、いろんな人の話を聞いてみて、だんだんと興味がわいてきました。そして、途上国へ行っている人とふれ合って、世界の人と交流がもてたらいいなと思いました。

ボランティアは、日本では老人ホームなどいってすることはできるけど、途上国に行くのは今は、なかなかできることではないのでこれからは、一番身近にできることで、募金をしたり、プリペイドカードを集めて、世界に役立てることをしていきたいなと思いました。もっと多くの人にもこの状態を知ってもらいたいと思いました。

岐阜県立揖斐高等学校3年 中野 由花

国際協力体験をして

今思えばとても短く感じました。でもすごく学べたし楽しかったです。始めはかた苦しい面持ちでやっていたけれどグローバル・ビンゴや交流食事会などで楽しく思いました。

貧困や飢餓で苦しんでいる原因は戦争が起きているためや教育が受けられていなかったり技術を教われないためだと思っていました。日本はあまり援助などをしていないと思っていましたが、研修員の受け入れをして国づくりに必要な技術や知識を習得して帰国することや、専門家を派遣して相手国の技術水準の向上を図ったりしています。国際協力に関わる人たちのお話を聞いて始めアフリカなどの国に行くと感染などそういうのが心配だったけれどそんな事はないそうです。それに写真を見たらとても楽しそうでした。でも貧富の差は着ている服で分かったのがちょっと悲しかったです。

ケーススタディでグループに分かれて一つの問いにたくさんのさまざまな意見がでておもしろかったです。

このような開発途上国をもっと安心した暮らしにするには私達のような発展している国の一人一人の力が必要です。最後のスピーチで先生がこのプログラムに参加していい事を言っても食事を残したりジュースを買って欲しいと言ってみたりしてやはり自分中心で物事を考えては意味がないと言っていたのが心に残りました。途上国の状況を知らない人は多いです。理解してもやっぱり自分は自分で相手国の人は相手国の人というような考えを持ってしまうけれど、心のこもった協力をして世界がよくなっていけるよう願っています。

またこのような会を続けて行って欲しいです。ためになりそして楽しい会でした。

岐阜県立揖斐高等学校3年 吉田 侑加

この高校生国際協力実体験プログラムに参加する前は、国際協力という言葉が余り耳にした事もなく、考えた事ありませんでした。たまにTVなどでやっている、政府のお金の援助、新聞のすみに載っている青年海外協力隊などを、ちらっと目にする程度でした。

しかし、このプログラムに参加して、国際協力と言っても、日本語教師・植林・保健士・医師・ナースなど、いろいろな分野での国際協力があることが分かりました。そして、ボランティアや援助をする中での、きびしさ、様々な問題や難しさなどがある事も分かりました。

なぜなら、同じ国の人間同士でも、人間との付き合い方は難しいのに、まして、全く違う文化で、生活慣習も違い、言葉も違う中で初めて会う人との付き合い方は、簡単ではないと思ったからです。

今まで、国際協力というと、何だかとても大きな事で、すごく遠くにある様な感じを受けていたけれど、今回このプログラムに参加して、前よりは、ずい分身近に感じるようになりました。

それでは、今の自分には何ができるかと言ったら、それはある程度限られてくると思います。だからまず、身近にあり、身近な事から、少しずつでもいいから始めたいと思いました。例えば、募金や電話からの募金、使わない物などを集め送ったり、又、その途上国の現実、現状を知る事もできます。

このプログラムに参加して、国際協力というのを余り考えた事がない私にとって、考える機会ができて、本当に良かったと思います。

三重県立伊勢高等学校2年 伊藤 理衣
プログラムに参加して

なんか今思い出しても夢かと思うぐらい普段の生活では体験できない濃い三日間だったなあと思います。(だいぶ時間がたっているせいもありますが。)確実に私に大きな影響を与えてくれたらと思います。

何がよかったかってまずはプログラムの内容ですが、他の学校のみなさんの積極的で意見をしっかり持っているという所です。最近手を上げて自分の意見を言う機会なんてなかったの、それも貴重な体験でした。

トイレの話(ケーススタディ)は難しかった。久々に頭をフル回転させてみました。でもそれだけの価値はあったと思います。私には難しかったのですが、2日目のお話もそうなんです。JICAにとっても興味を持てるプログラムだったと思います。

誰かも思っただろうけど、私もこれから今回のプログラムで学んだことをいかせるような経験がまたできたらいいなあと思っています。

最後のまとめの時にちょっと「英語をもっと勉強したい」と言ったけど、それはとりあえずの話で、自分の英語はまだまだだと思ったからで。今後の国際交流にあたって必要なのは自分の国の文化をいかに知っているかだと思うのです。自分は日本人なのだから自分の国の事ぐらい知っておかなきゃ!というわけです。そして、とりあえず自分の周りにこのプログラムで学んだこと少しでも広めたいと思います。そして何らかの形で関わって協力できたらと思っています。本当に楽しかった。じゃまた～。

三重県立伊勢高等学校2年 牛江 麻貴
国際協力プログラムに参加して

「参加したい!!」私が今回のプログラムを知って最初に思ったことだ。とにかく、私は国際協力について発言出来る場が欲しかった。飢えて飢えていらいらしていた時に、捜していた獲物を見つけたって感じ。学校では全くそういう機会がなく、校風もそんなのではない。話したくて話したくて、うずうずしていた。

貧困とは何か、国際協力ってどんなのだっけ?さあやるぞっとは思っただけけれど、漠然としていて事前レポートをどのようにまとめたらいいのか、はたっと止まってしまった。

それが当日参加して、“ケーススタディ”をやったとき、私は初めて国際協力の実態を、ほんの一端ではあるけれど、つかんだ気がした。「国際協力=良いこと」の図式が私の頭の中には成り立っていたので、現地の人にとってはありがた迷惑なこともあるだなんて、それまでちっとも気づいていなかった。

第一の難関を突破したと思ったら、また問題が、そしてそのまた問題が出てきて唖然としてしまった。「どっから手えつけばいいの。」次から次へと難題が押し寄せてくる。私はこれまで、国際協力で大変なのは、言語、自分の健康管理だと思っていた。今私は“協力する中身”も大変だと思う。国際協力の大変さを私は限定していた。まだまだ思いもよらないような大変さがごまんとあるんだ。

話し合い、発表では、皆自分の意見を、たとえ反対意見であっても、ためらわずにバンバン言う。そうして色々な異なった考えを知る。その中において、すごく気持ちがよかった。

JICA自身もその開発が果たして本当に村のためになるのか、悩み、考えながら前に進んでいることも知った。

私にとって国際協力は、もっと大きな問題になったけど、今まではっきりしなかった国際協力の実態が、ほんやりと見えてきた。仲間の誰かが言った。“Act locally, think globally.”と。私はまだその入口に立っただけだ。このプログラム、きっと次の行動に繋げていきたい。

三重県立伊勢高等学校2年 小川 真由

プログラムに参加した皆さんは、ディベートなどした時に、自分の意見や意思をとってもしっかり持っていて、それをまた巧みに言葉を使いながら、上手に人に伝えている事が、なんて素晴らしく、すごいだろう！と思い、自分の言いたい事ははっきり言えないでいる自分が、少し恥ずかしく思ったし、うらやましくも思えた。これからは、自分の課題にして、こういう人になっていきたいなあと思った。高校生になってから、なかなか、色々な事を考えるという事を、中学生の頃よりしなくなったような気がする。私はプログラムで、久しぶりに色々考えたり、悩んだり出来たので、参加でき、いい経験をさせてもらった事が、とっても嬉しいし、本当に良かったと心の底から思った。

私は少し前から環境問題みたいな事や、発展途上国の実態等に、結構興味があったので、貧困という課題を与えられた時もなんだかドキドキしました。でも実際私は無知だという事

も、参加してよくわかった。今までは、ただ漠然と興味があっただけで、どんな仕事があり、各々の仕事に就く為には何をやっておけば良いのか等知らなかったし、調べ方がわからないというのを理由に、必死になって調べようともしていなかった。しかし、今回人と触れ合うたびに、私は、もっとこういう仕事に就きたい、と強く思った。その為、これからどんどん今まで知らなかった事を、知っていけるように努力して調べたり、このような機会がなかったら知り合っていなかったかもしれないジャイカの人達にも色々聞いてみようと思った。そして、今回知り合った人達皆は、自分の仕事に誇りを持ちながらやっていて、大変ながらも楽しくやっているように見えた。私も、やりたい事を、楽しくやっていけるように、頑張っていきたい！

三重県立伊勢高等学校2年 山下 芽 プログラムに参加して

開講式で並んで座っている間、私はJICAの活動をあまり知らなくて、未知の世界にとび込んだような気がして、すごくドキドキしました。実際に全てが新鮮なものばかりでした。

まず驚いたのがケーススタディでした。私はプログラム案を見たときいきなり出された設問にちゃんと自分の意見が言えるのだろうか、ととても心配でした。でもやってみて、みんなのどんどん出てくる意見にも刺激されいつしか考え出したら止まらなくなっていました。しかし設定と想像力、一応の知識だけでは、やはり相手の国との価値観がずいぶん違うので悩まされました。おまけに民族や宗教習慣も考えると国際協力は途方もなく遠いものに思えました。決して答えの出るような問題ではなかったからです。でも仲間の方は私の見落とししていた所や考えもしなかった案を教えてくれて、一人一人の意見の大切さを痛感しました。同時に他の事に対しても一人一人意見が言えるような場所（雰囲気）が今の私達にはすごく必要だと思いました。

そしてとても楽しかったのが研修員との交流食事会でした。英語の質問を考えてくるというので私はもっと堅苦しいものだと思い質問が重なったらどうしようとか心配でしたが実際に自分で積極的に相手を探すというもので、たくさんの人と言葉を交わすことができました。なかなか思っていることが伝わらなくて苦労したけれど、どの人も質問に対して自分の

知っている限りのことを教えようとしてくれてすごうれしかったです。

3日間すごく忙しかったけど、今でも一つ一つの事をはっきりと思い出すことができます。

きっと“国際協力”や“ボランティア”などの言葉を聞く度に思い出すのだろう。

大きな財産を得た夏でした。

石川県立金沢西高等学校1年 桜井 菜々恵

「ああ〜っ。私って本当に英語力がないなあ〜。」と、今回の体験で改めて思いました。交流食事会で初めて、めったに会うことや話すことのできないネパールの人やイランの人と交わることができました。そして、ネパールの人と話をしたとき私は何も話せずに終わってしまいました。せっかくのいい機会だったのに自分で断ち切ってしまったような感じがして、何もできない自分がとても悔しかったです。

青年海外協力隊の人達の話聞いた時も、まず英語が共通語として用いられているのを知りました。今学校で習っていることが社会にでて役立つことができるのならとてもうれしいことだと思います。

幼い頃、両親に「英語は絶対に大事だぞ。」と言われたことがあります。その頃はまだ外国の人と会ったことはなかったし、まして何で勉強してまで英語が大事なのかも分かりませんでした。けれど今回の体験をしたおかげでやっとその意味が分かった気がします。英語一つで外国に住んでいる人と話せるということ。とても大事なことであり、うれしいことだと思います。

今回の体験で一つ、目標ができました。また、今回のような体験に参加することもあるかもしれません。その時に今回のように何もできないままに終わるのは絶対に嫌です。だからまた繰り返すことのないように、それまでに今よりは英会話が少しでもできるようになりたいです。

この体験でほかにも色々と感じたことはたくさんありました。この感じたことを忘れずにこれからもいろんな方向から国際協力を楽しく見れたらいいなと思います。

石川県立金沢西高等学校2年 笹崎 恵美
国際協力の形

このプログラムは期間的にはちょうどいいと思っていたけれど、終わってみるとあっといふ間だったような気がする。1日目の交流食事会で研修員の人と話をした時に、自分の言いたいことをなかなか上手く英語にできなくて四苦八苦していて、その時会話力が話をつなげるのにどれだけ大きな役割を果たしているか、思い知らされました。また、2日目の「国際協力に携わる人と話そう」は、私がこのプログラム全体を通して一番印象に残ったものだった。青年海外協力隊についてなど、文章だけではあまりよく分からなかったけれど、本当に現地に行って行った事や周りの人々の様子などを聞くと、自分はそこに行かなくてもその場の雰囲気伝わってきて、説明を聞いてもとても分かりやすかった。話してくれた方々の中には写真をたくさん見せてくれて、言葉からは感じとれない人々の表情がとてもよく写っていたと思う。

それから、私は3日間参加してみて自分自身が今までと比べて少し変わったことに気づいた。今までの自分は人前で話すのが苦手に進んで意見を言う方ではなかったけれど、ケーススタディーなどで自分の考えを言う時に人前でも自然と言いたいことが言えるようになってよかった。

全体的にこのプログラムで発展途上国での問題についてよく考えさせられた。国際協力に参加してそういう問題に直面していく人達は、みんなそれぞれ自分のやり方で自分らしい関わり方をしているように思えた。そして、仕事に誇りを持っていて楽しいという声が聞かれたのがすごくうらやましいと思った。私自身、将来自分の好きな職業、自分が育つ職業に就ければいいと思う。そういう自分を見つめ直すという面でも、今回参加してみて、いい経験、いい機会になってよかった。

石川県立金沢西高等学校2年 中林 七穂

今回の合宿を終えて

私は今回の国際協力実体験プログラムに参加して、本当にいろいろな事を学んだと思います。自分の意見を言うのが苦手だった私が、今回のケーススタディーで発言できるようにな

れたし、いろいろな人の様々な意見も聞けたからです。

でも今回の合宿で一番心に残ったのは外国人研修員との交流会です。私達はネパールのBATASHさんととても仲良くなり、一緒にごはんを食べながらたくさん話をしました。BATASHさんはとても分かりやすいゆっくりとした英語でおもしろい話をしてくれたり、私達としっかり会話をしてくれました。私達の高校の国際交流委員会が目標としている心のキャッチボールがちゃんとできたと思えるような接し方ができて、すごく感激しました。国際交流委員会に入っているといても、あんな風にしっかり外国人と接した事が私はなかったので、良い刺激・経験になったなあと思いました。

それから「国際協力に携わる人と話そう」というので現地へ行ってきた人などの生の声を聞いたのがとても良かったと思います。中でも JICE コーディネーターの古沢幸雄さんの言葉が心に残っています。「私は最初に必ず研修員に教える事があります。『奢るな、怒るな、^{オー}怠るな』です。この3つのOは思いやりの中で成り立ちます。」という言葉と「国際協力は感情移入が大切だよ。」という言葉です。この話を聞いた時、本気で感心しました。そのおかげでその後の人達の話もより共感して聞いた様に思います。

私は今回の合宿で自分が国際協力について何も理解していないことに気づきました。だから、まだ理解しようと努力中の私だけど、身近でできる国際協力はやっていきたいなあと思うようになりました。ちょうど私の高校には国際交流委員会があるので、その中身も深めていけたらいいなあと思います。

石川県立金沢西高等学校3年 富田 知子

「国際協力」——テレビや新聞やポスターの中でよく見かける言葉です。私にとっての国際協力とは、貧しい国の人たちのために何かをしてあげる…そんなイメージの強い、まるできれいごとでした。今回の研修の中で扱われた「ケーススタディ」や「国際協力に携わる人と話そう」というプログラムは、世界の様々な国や地域で国際協力に関わってきた人の生の声を聞く良い機会となりました。必ずしも受け入れられるわけではない、必ずしも歓迎されるわけではない…それが現実でした。現地の人たちと同じ高さでものを見、考え、行動して初めて、国際協力が成り立つのだと実感しました。

NGOや青年海外協力隊の一人として現地へ赴いた人たちの中には男性もいれば女性もいたし、農業を教えた人もいれば言語を教えた人もいました。きっと、自分の持っているものや自分にできることを分け合うことができれば、それでいいのだと思います。このプログラムを通して、国際協力に必要なのは、いろんな人がいて、いろんな考え方があって、いろんな文化があるということを確認、受け入れられる、柔軟な姿勢なのだと思います。その中で、自分のしっかりとした意志や考え・見方を持てるようになれば、もっともっと自由に楽しい国際協力ができるような気がします。

高校生としての今の私にできることは、まず自分の国についてつまり日本の在り方や課題についてもっとよく知ることです。そのためにも、異なる文化や宗教、考えを持つ人たちと関わって、自分の視野を広げていきたいです。そういう意味で今回行われた「研修員との交流食事会」は、刺激のある楽しい一時となりました。こえからもこうした機会を積極的にとらえて私にできる「国際協力」を考えていきたいと思っています。

福井県立若狭高等学校3年 田中 章広 国際協力実体験プログラムに参加して

僕は、このプログラムに参加するにあたり、一番楽しみにしていたのは、国際協力に携わる人達と話すことでした。というのは、僕自身国際協力に関心があるものの、日々の生活の中で意識する機会が少なくイメージとしてとらえている部分が多く、実際は、どんな事をやっているのだろうかという疑問があったからです。そして、今回の研修会では、予想以上の答えが返ってきました。僕の疑問に対し、自分が現地に行って見てきた体験を例にしたりして丁寧に説明してくれました。教科書の中で語られているものは違い、じかにそういう話を聞く事は、聞いていてもおもしろく、すごく興味がもてるもので、自分の考えの誤りや、未熟さを発見することもでき、本当に良い体験をさせてもらったと思います。

また、ケーススタディでは、一つの事例を扱い、問題に取り組むにあたり、取り組む姿勢や、文化、言葉の壁をどういうふうに乗越えていくかという事を考えました。僕は、このケーススタディをやったのは、国際協力は、相手の考えをしっかりと理解しなければならない、という事です。先進国の一方的な押しつけでも後進国の甘えでもなく、お互いが尊重しあって調和を保って事を進める事が大切だと感じました。そういう意味でも多くの人

と討論をして、深く追求する事は大切だと思います。

最後に今回この研修に参加した事は、僕にとってとても貴重な体験だと思います。

たくさんの人と出会う事ができ、親しくなれ、また自分の考えを広げる事ができたのは、沖浦さん、大久保さん、石井さん、野口さんそして斎藤さんのおかげです。本当にありがとうございました。

僕も一生懸命勉強し、遊んで、視野を広げて、いつか国際協力に貢献できればと思います。

福井県立若狭高等学校3年 西尾 麻衣子

国際交流プログラムに参加して

私は今まで、短期留学や外国人と交流したりというイベントには参加したことがあり、他国の文化や慣習に触れる機会は多くありました。だから、文化の違いにはすごく興味を持っていました。しかし、国際協力という分野には、全く触れたことが無く、きっとこのプログラムに参加しなかったら、私は国際協力の分野に「触れず嫌い」のまま国際関係学部進学してしまうところだったと思います。ケース・スタディで実際に国際協力に携わった人の気持ちを考えてみたり、青年海外協力隊に参加した人の本音が聞けて、国際関係を社会的な視点から見てみることの面白さに気付きました。それから、今までは、青年海外協力隊はつらく、体を壊したという話を聞いたことがあり、悪いイメージしか持っていませんでしたが、今回話をされた二人とも生き生きしておられて、国際協力もつらいことばかりではないことがわかりました。私も、一度、発展途上で役に立つ仕事をしてみたいと思います。

また、今回の国際交流会で、「日本語の冗談を英語に直訳しても通じない」ということを身をもって体験しました。しかも本当に「シャレになっていない」状態だったので、英語のちょっとした言い回しを勉強しようと思いました。今回のトラブルがトラウマにならないように英語を使い続けたいです。

今回のプログラムでは、いろいろな経験ができ、進路を決める上で本当に重要なものとなりました。参加して本当によかったです。

国際協力実体験を振り返って、私ができる事は何か

この三日間は、私にとって、とても楽しく、ためにもなった三日間でした。

特に心に残ったことは、外国人研修生との食事会でした。私は、学校のテストなどでは、比較的できるので、話せるかなと思っていたけど、いざ話そうとすると、言いたいことも言えなく、言ってることも分からなくて、かなりショックでした。しかし、今のうちにこういった経験をすることで、これからもっと頑張ろうと思えたのでよかったです。また、単に英語を覚えるだけでは、文化や感覚などの違いから、思わぬ誤解を招いてしまうことがあることも実感できました。英語は、その気になれば覚えることもできるだろうけど、それでも誤解することがあることを覚えておかななくてはならないと思いました。

他には、国際協力に携わる人の話を聞いて、それぞれが、自分の考えをしっかりとって活動されていて、すごいと思いました。貧しい国の人が進進国に頼りきりにならないような援助をしたり、本当に彼らの為活動していることが分かりました。しかし、高校生の私達に、こんなことはまだ無理だと思います。だから、今はJRC部で行っている使用済みテレビ集めに協力したり、ちょっとお菓子を我慢して募金をする、といったことから始めていこうと思います。また、国際協力などについて、友達と意見を交換させて、考えを深めていきたいと思います。

富山商船高等専門学校1年 南 明日佳

私は国際協力実体験プログラムに出席して普段考えないようなことを考える機会を持つことができました。私は今まで貧困の国への援助はただものやお金や人材を送ればイイと思っていて、現地の人々の文化とか伝統とか気持ちとかを考えていませんでした。私たちは、人のためになりたくても現地の人に拒否されたら何もできないし、大変なことがたくさんあるのだなあと思いました。だから、JICAの仕事は本当に好きでやる気がないとできない仕事なんだなあと思いました。

私は今、富山商船で情報工学について学んでいます。私たちは先進諸国で最先端の知識を学ぶことができますが、発展途上国ではパソコンなどの機器を買うお金もないし、それについて学ぶことも難しいので、豊かな国と貧しい国との間がどんどん開いていって、問題はなかなか解決しないなあと思いました。

これからは、自分も少しでも力になれるようにJICAのような国際協力に興味を持って
いこうかなと思います。

国立富山商船高等専門学校1年 村田 百絵
国際協力実体験プログラムを終えて

私は今回のプログラムをとおしてたくさんのことを学びました。今まで「貧困」には全く興味がなく考えたりしなかったのが初めて知ったこともいくつかありました。貧困の国の食生活の状況や、どんな暮らしをしているのかなど。また語いの貧困や心の貧困というものもあることを知りました。

ケーススタディをとおして考えることの大切さも学びました。私は文章を読んで考えることが苦手なのでケーススタディの始めの方はどうしたらいいのかわかりませんでした。でも班の人の意見を聞いたりしているうちに少し自分の意見をもてるようになりました。

でも一番うれしかったのはやっぱり先輩の方々やJICAの方々とは仲よくなれたことです。最初は不安でいっぱいだったのに最後には帰りたくないと思いました。それほど楽しかったんだと思います。このプログラムではいろんなことを体験できたし、夏休みのいい思い出になったので参加してよかったです☆

国立富山商船高等専門学校3年 綾部 祥子
名古屋研修を終えて

この名古屋研修で私は多くのことを学びました。初めて名古屋に一人で行って、人の多さに驚き、地下鉄で迷ったのも、いい経験になりました。

そして、国際協力や援助についての話は今までそんなに真剣に考えたことがなかったので、皆の意見を聞いて驚きました。学校ではこのような機会がなく、授業中は話を聞くだけなので、色んなエネルギーを消耗しました。

貧困についてもそうでしたけど、私は絶対こうだと思っけていても、他の人は全く違ったりして、お互いを認め合い、そこから考えていくことを学びました。

そこで、研修を終えて考えたことは、コミュニケーションとして言葉は大切な要素なので、まじめに英語と中国語を勉強しなければならないということです。将来についても今迷

っていますが、人に教えることをこれから学びたいです。

今回、この研修に参加できて良かったです。食事もおいしかったし…（特に初日の国際料理が印象的でした。）一人部屋はテレビも付いていて快適だったし、友達もできたのでいい思い出になりました。

このような機会をくださったJICAの職員の方々に深く感謝しています。

どうもありがとうございました。

国立富山商船高専3年 西島 麻美

私が思ったこと。

今回参加したプログラムの中で印象的だったのは、NGOの人の話だった。どんなに頑張ってもいっぱいばいばいで、大海に落つ一滴の雨粒でしかない現状の話が一番リアルでインパクトがあった。NGOの人間というと常時なにかに追われており、近辺には居ないので話を聞くだけでも稀少な体験だったように思う。だからか、聞くもの全てに既知のものもなく、とても興味深かった。

彼（ら）の活動を知って思ったことは、こちらの知恵とあちらの知恵が融合しているなということだった。石積みの最初の一つを積みみたいにささやかだけど大切な一步を、木を植えるいう方法で進むことは、とても自然で無理を感じなかった。無理がないということは崩壊をきたす兆しがないということだ。それは相互理解と自力で築いていくという姿勢が基盤となっているからこそ成り立つもので、将来性を踏襲した意味で合理的だと思った。私はそれこそが文化や知恵のあるべき融合した形だと考えていたので、ひどく感心した。協力方法はおそらく他にも種々あるだろうが、私にはこの方法が一番好ましかった。

国際協力という言葉が、実は私は好きではなかった。同じ人間と助け合うのに、わざわざ国際と頭に付けるのが兎に角、気に入らなかった。けれど、改めて考えると、この言葉には他人という意味があると思った。同じ人間であっても他人なのだという意味だ。門戸が違うという意味だ。いわんやそれは相互理解の必要性を端的に認めているように私には思えるのだ。無理をしなくて済むほどの深い理解の必要性。それは基本だ。だからこそ、私はそれを大切にして、人と協力したり、為になることをしたりしたいと思った。そんなことを考えさせてくれたプログラムだった。